

昭和61年度

唐古・鍵遺跡

第26次発掘調査概報

1987

田原本町教育委員会



S K—2004井戸内遺物出土状況（平安時代）



木製杓子（弥生時代前期）



打製石剣（弥生時代中期）

序

田原本町は古代遺跡が数多くねむる奈良盆地の中央にあって、古代より肥沃な穀倉地帯として栄えてきました。これは稲作文化が伝播以来、大規模な集落遺跡が多く残っていることから窺えます。このような遺跡の一つに弥生時代の代表的な農耕集落として唐古・鍵遺跡があります。

この唐古・鍵遺跡の調査も継続調査として10年を経、第26次を数えるまでになりました。第26次調査は、昭和初期にあって初めて弥生文化を明らかにした唐古池内部の調査地点の東側にあたります。調査では数々の弥生の遺物とともに中世の遺物も多く出土しました。その結果、「韓人池」は唐古池ではなく別にあるという事実も判明し、大きな成果をあげることができました。

さて、本書ではこのような第26次調査の成果を調査概要としてまとめることができました。本書に示した調査成果が幾分なりとも御活用いただければ幸いに存じます。しかしながら、不備、不足な点があるかと思えます。御批判、御教示を賜われれば幸甚です。

今後もおって調査を実施していく予定であり、あわせて唐古・鍵遺跡の史跡指定にむけ準備を進めているところでもあります。どうか関係各位のご協力とご指導をお願いする次第であります。

田原本町教育委員会

教育長 岩井光男

例 言

1. 本書は、田原本町教育委員会が老朽ため池整備事業（田原本町経済課）に伴う事前調査として実施した唐古・鍵遺跡第26次発掘調査概報である。
2. 発掘調査は、橿原考古学研究所の指導を得、田原本町教育委員会社会教育課がおこなった。現地調査は藤田三郎があたった。
3. 調査にあたっては、唐古自治会の森田好彦・中村隆一両氏をはじめ、唐古在住の方々に御理解と御協力を賜わった。記して感謝します。
4. 調査補助員として、桑原久男・吉井秀夫（京都大学）、豆谷和之・廣瀬克彦・久山高史・宇野祐子・三沢由美（奈良大学）、松井慎一郎・天石夏実（同志社大学）の学生が参加した。
出土遺物の整理作業にあたっては、上記学生の他、広川守・河野一隆・多賀茂治（京都大学）安藤広道（慶応大学）、真鍋成史（同志社大学）、樋泉彰子・大浦靖子（奈良大学）、梅原一恵・河野典子・末広真理子・福島加代子・岡坂和子・宮崎玲子の諸氏の協力があつた。
5. 本概報の執筆及び編集は藤田がおこなった。

目 次

I. はじめに	1
II. 第26次発掘調査の概要	
1. 調査の全容	3
2. 遺 構	
(1) 堆積土層	4
(2) 弥生時代前期の遺構	8
S K-2201・S K-2203, S K-3203, S D-1201	
(3) 弥生時代中期の遺構	9
S K-2104・S K-2108, S K-1102, S K-2103, S K-2116	
S D-2103, S D-2102, S D-2105・2106・2107	
(4) 古墳時代の遺構	12
S K-2106, S D-1101	
(5) 中世の遺構	13
S K-1001, S K-1002, S K-2001, S K-2004	
3. 出土遺物	
(1) 土 器	15
S D-1201出土土器, S K-3203出土土器, S K-2104出土土器	
S D-2103出土土器, S D-2102出土土器, 搬入土器, S K-2004出土土器	
(2) 木製品	23
(3) 石 器	25
打製石器, 磨製石器	
(4) その他の遺物	26
4. ま と め	
(1) 遺 構	27
(2) 遺 物	28

I. はじめに

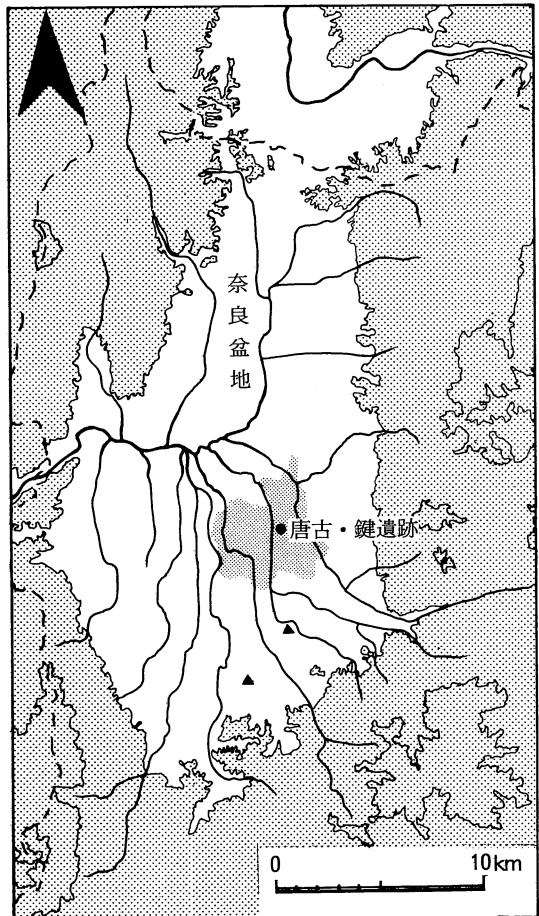
唐古池の発掘は昭和11・12年におこなわれた大規模な調査から、第18次（昭和59年度）、第23次調査（昭和60年度）を経て、今回第26次調査を老朽ため池整備事業に伴う事前調査としておこなうことができた。本年で第1次調査以来、半世紀を迎えている。これまでの成果をあげると第18次調査では北方砂層と弥生時代後期の溝（環濠？）、第23次調査では弥生時代中期の大溝5条、後期の大溝1条、北方砂層、木棺墓2基、井戸、土坑など多数の遺構を検出した。唐古池における今まで3回の調査から唐古・鍵ムラの一中心地、すなわち、北地区として重要な地区であること

第1表 本書掲載発掘地

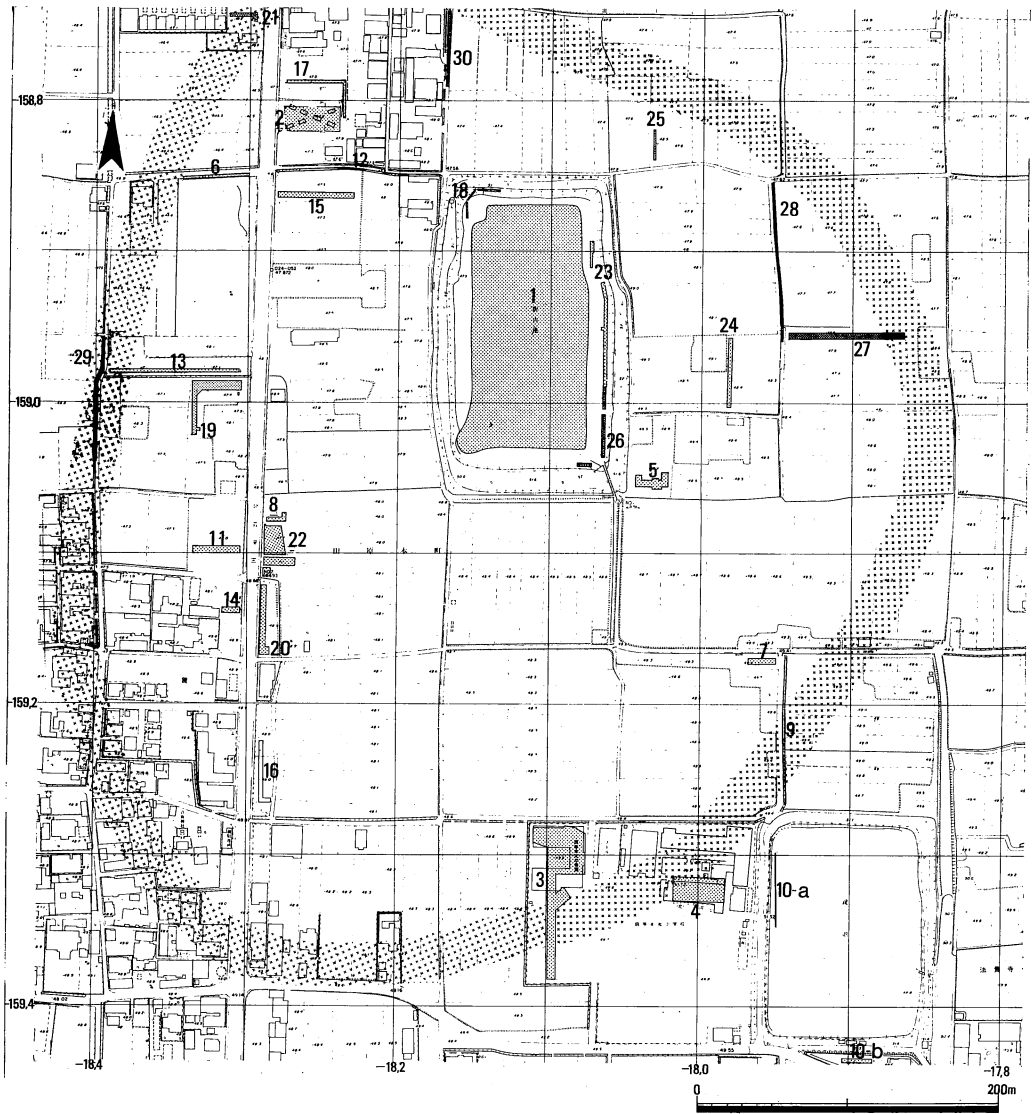
調査次数	所在地	原因	地目	土地所有者	調査期間	調査面積
第26次	唐古126番地	老朽ため池整備事業	池	唐古大字	1986. 12. 15～ 1987. 2. 24	115 m ²

とが判明してきた。特に第23次調査では本遺跡で初めての成人木棺墓が検出でき、墓地の一面をおさえることができた。このように唐古池の発掘は遺跡内でも重要な調査区となっている。

さて、今回おこなった第26次調査は唐古池の東側・南側堤防内側で、第23次調査の南側延長部分である。この部分は唐古池南半の遺構集中地区の東南部分の一面にあたり、最も遺構が検出される地区として想定された。しかし、池水が残り、また、調査が擁壁工事にともなう部分に限られたことから、調査面積は小規模になってしまったが弥生時代前期から古墳時代、中世の各時代の諸遺構を検出し、改めてこの地区の重要性を認識することができた。弥生時代において本地区が居住区であったことが、検出された土坑や溝から判断でき、昭和11年当時の発掘の状況の一端をうかがい知ることができたことは有意義であった。このように発掘によって遺跡の一端が明らかにされるのと引き換えに、鬱蒼とした木々に囲まれた学史に残る唐古池が、整備された池に変貌してしまうのは残念である。



第1図 唐古・鍵遺跡の位置



- 遺跡(集落)推定範囲
- 既調査地(第1~25次)
- 昭和61年度調査地(第26~30次)

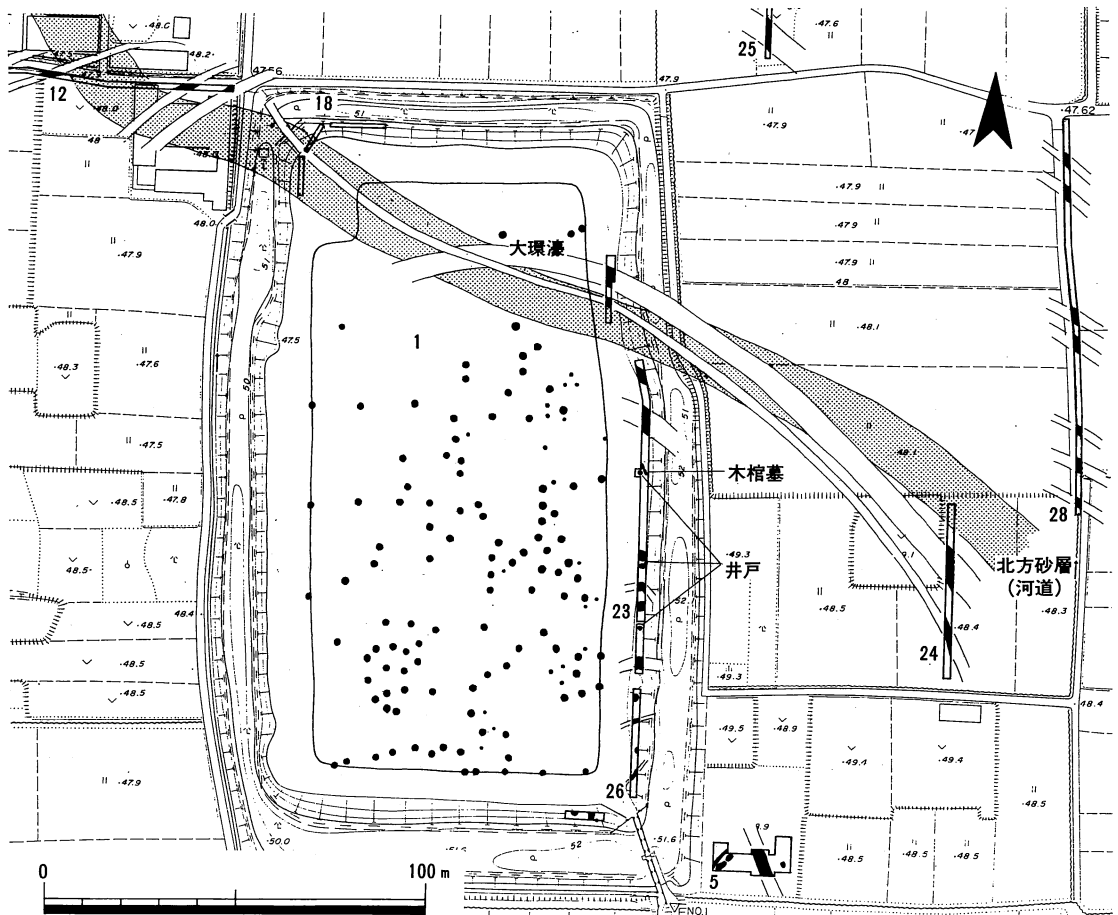
第2図 唐古・鍵遺跡の範囲と調査地点

II. 第26次発掘調査の概要

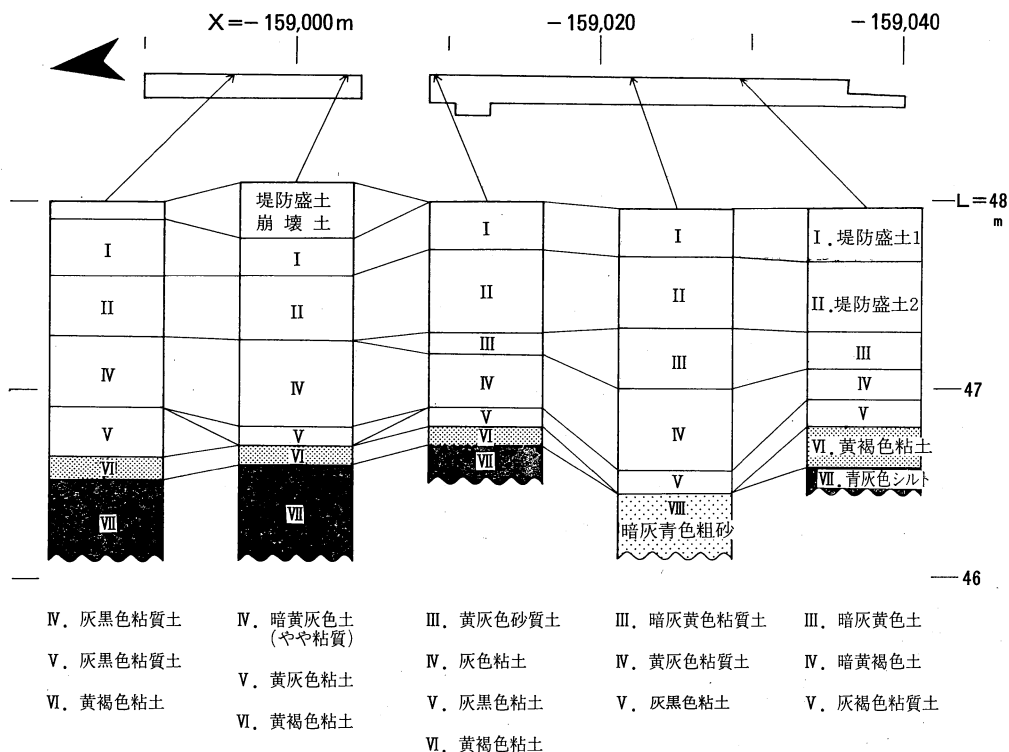
1. 調査の全容

本調査地は遺跡の中央部にあたり、唐古池内の南東隅に位置する。第1次調査、第23次調査と隣接し、遺構密度の高い地区である。

調査は堤防擁壁工事にかかる部分に沿ってトレンチを設定し、樋の部分については対象外とした。そのため3つのトレンチとなり、北から第1、第2、第3トレンチとした。第1トレンチは南北約14.3m、幅1.9~2.4m、第2トレンチでは南北27.5m、幅2m、第3トレンチは東西約9m、幅1.9~2.5mとなった。第2トレンチでは遺構の把握のため部分的に拡張した。本地においては水田耕土層や床土層がなく、表土が堤防盛土層となっているため、この層を機械力でもって除去した。その後は人力による遺構検出につとめ、弥生時代前期から中世の諸遺構を検出した。その結果、唐古・鍵ムラの一中心地であったことが判明した。



第3図 唐古池周辺の遺構配置図 (S = 1/2000)

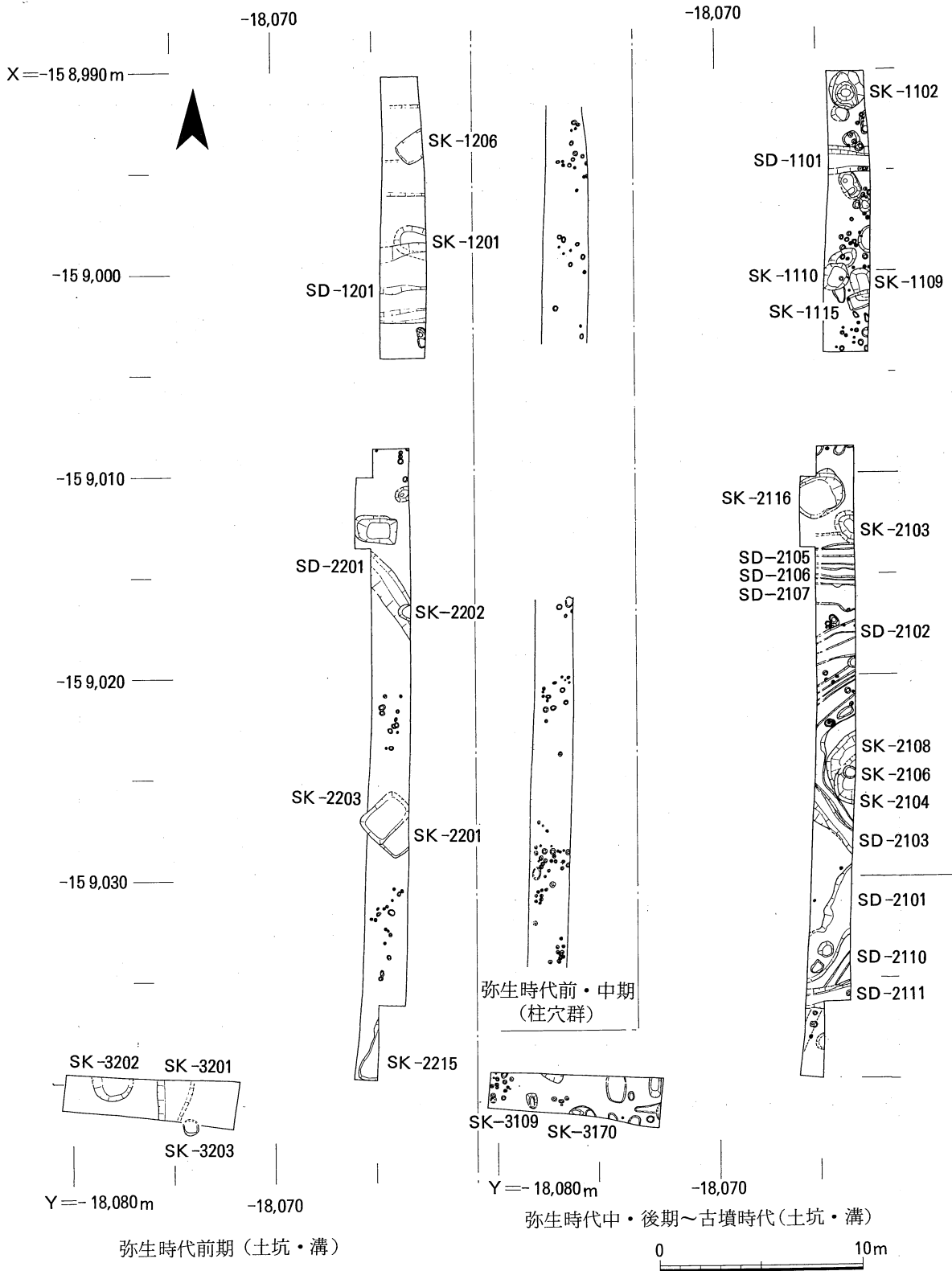


第4図 第26次調査基本土層関連図

2. 遺構

(1) 堆積土層

トレンチが三カ所に分かれるが、南北のトレンチである第1・第2トレンチでは基本土層の変化を知ることができる。本調査区は各時代の遺構の切り合い関係が多く、基本土層の残っているところは少ない。したがって、基本土層は線的につながるものではなく点的にしか把握できない。第4図に第1・第2トレンチの基本土層の柱状図を作成し、その関係を示した。本調査区では堤防の基底を切ってトレンチが設定されているため第1トレンチでは堤防盛土の崩壊土が10~30cmみられるし、各トレンチには堤防の盛土層(第I・II層)が全面に広がっている。第II層下には第III層(黄灰色砂質土・暗灰黄色粘質土)、第IV層(灰黒色粘質土・黄灰色粘質土)がみられ、弥生時代前期から中世に至るまでの遺構面となっている。第III層から第IV層(灰黒色粘土)は弥生前期の土器の土器包含層で、50~90cmの厚さがある。第VI層(黄褐色粘土)・第VII層(青灰色シルト)は弥生以前の堆積で、第VI層は第VII層の上で形成されており、第VII層が欠如しているところでは第VI層はない。弥生以前においては第2トレンチの中央部分が微凹地であったことがわかる。そして、弥生前期段階には第III・IV・V層の形成で微凹地が消滅している。これらの層は人為的な整地土層であるかも知れない。



第5図 第26次調査遺構平面図(1) 弥生～古墳時代 (S = 1 / 300)

第2表 第26次調査主要土坑一覧表

土坑番号	平面形態	断面形態	床面形態	坑底土層	規模 (m)			坑底標高	施設物	時期	主要遺物	備考
					長軸	短軸	深さ					
SK-1001	円形	逆台形	皿状	青灰色シルト	2.8	1.4以上	1.5	45.7	なし	中世		井戸
SK-1002	円形	円筒形	平担	青灰色シルト	径0.9		1.0	46.3	なし	中世	瓦器碗	井戸
SK-1102	円形	二段の逆台形	平担	青灰色シルト	径1.8		1.6	45.6	なし	弥・Ⅲ	完形甕、手斧柄未製品	井戸
SK-1103	長方形	浅い逆台形	皿状	黄褐色土	1.5以上	0.8	0.2	47.0	なし	弥・Ⅲ	完形甕	浅い土坑
SK-1109	楕円形	皿形	皿状	黄褐色土	1.7	(1.2)	0.5	46.6	なし	弥・Ⅲ	異形石鏃	浅い土坑
SK-1110	不整円形	逆台形	平担	青灰色シルト	1.5	(1.2)	0.7	46.5	なし	弥・Ⅲ		
SK-1115	不整楕円形	逆台形	平担	黄褐色土	1.1	0.6	0.4	46.8	なし	弥・Ⅲ		
SK-1201	楕円形?	逆台形	皿状	青灰色シルト	1.5以上	1.2以上	1.2	45.9	なし	弥・Ⅰ		大形土坑
SK-1206	長方形?	逆台形	平担	青灰色シルト	1.7以上	1.6以上	0.8	46.4	なし	弥・Ⅱ		大形土坑
SK-2001	不整円形	逆台形	平担	青灰色シルト	?	1.1	1.2	46.0	なし	中世		井戸
SK-2004	円形	円筒形	平担	青灰色シルト	1.0	?	1.5	45.7	曲物組井戸枠	中世	柶、瓦器碗、土師皿、鉄鏃	井戸
SK-2103	楕円形	逆台形	皿状	青灰色粘土	推定2.0	1.4	1.3	46.0	なし	弥・Ⅲ	イノシシ頭骨、肩甲骨、管玉	井戸?
SK-2104	楕円形	二段の逆台形	平担	暗灰青色粗砂	2.4以上	2以上	1.3	46.0	なし	弥・Ⅲ	骨製紡錘車	SK-2108を切る
SK-2106	円形	円筒形	平担	灰黒色粘土	径1.5		1.0	46.3	なし	古墳・前	完形土器群	井戸SK-2104を切る
SK-2108	?	逆台形	平担	暗灰青色粗砂	2.6以上	1.2以上	1.2	46.1	なし	弥・Ⅲ		
SK-2116	楕円形	逆台形	平担	青灰色シルト	2.6	2.2	1.3	46.0	なし	弥・Ⅲ	木製杓子石剣	
SK-2201	長方形	逆台形	平担	青灰色シルト	2以上	1以上	1.0	46.2	植物繊維を敷く?	弥・Ⅰ		

土坑番号	平面形態	断面形態	床面形態	坑底土層	規模 (m)			坑底標高	施設物	時期	主要遺物	備考
					長軸	短軸	深さ					
SK-2202	不整形	逆台形	皿状	灰色粗砂	0.8以上	0.8	0.4	46.4	なし	弥・I	条痕文土器	浅い小土坑 植物を敷く?
SK-2203	長方形	逆台形	平担	青灰色シルト	2以上	1.7	1.1	46.0	なし	弥・I		SK-2201を切る
SK-2204	?	逆台形?	皿状	青灰色粘土	?	?	0.8	46.5	なし	弥・I		大形土坑
SK-2206	長方形	逆台形	平担	青灰色微砂	3.4以上	1以上	1.0	46.3	なし	弥・II?		大形土坑
SK-3107	円形	皿形	皿状	灰黒色粘土	1.3以上 (径1.4)		0.5	46.7	なし	弥・III		浅い土坑
SK-3109	不整形円形	逆台形	不整形	灰黄色粘土	6以上	0.3	0.4	46.8	なし	弥・II	大形鉢	
SK-3201	長方形?	逆台形	平担	黄褐色砂	2以上	1.7	0.7	46.3	なし	弥・I	建築材	大形土坑 (中に植物層あり)
SK-3202	円形?	逆台形	平担	黄褐色砂	径2.1		0.9	46.3	なし	弥・I		
SK-3203	円形	逆台形	皿状	青灰色シルト	径0.8		0.6	46.4	なし	弥・I・II		小土坑 (中に炭灰層あり)

第3表 第26次調査主要大溝一覧表

溝番号	規模 (m)		溝底標高	走行方向	継続時期						主要遺物	備考	
	幅	深度			I	II	III	IV	V	庄内:布留			
SD-1101	1.5	0.4	46.9	東一西							↔		
SD-1201	5.0	2.0	45.2	東一西	↔							木製杓子	
SD-2101	1.6	0.6	46.9	北東一南西			↔						
SD-2102	2.4	0.8	46.6	東北東一西南西			↔						
SD-2103	1.3	0.7	46.6	南東一北西			↔					完形土器群	下層はA溝・B溝の小溝となる
SD-2110	0.8	0.5	46.8	北東一南西			↔						
SD-2111	1.6	1.0	46.4	東一西			↔						

- ※ 遺跡番号については下記の基準に基づいてつけた。
- 1000 番台 - 第1トレンチ
 - 2000 番台 - 第2トレンチ
 - 3000 番台 - 第3トレンチ
 - 10番台 - 第1遺構面 (中世)
 - 100 番台 - 第2遺構面 (弥生中～後期・古墳時代)
 - 200 番台 - 第2・3遺構面 (弥生前・中期)

(2) 弥生時代前期の遺構

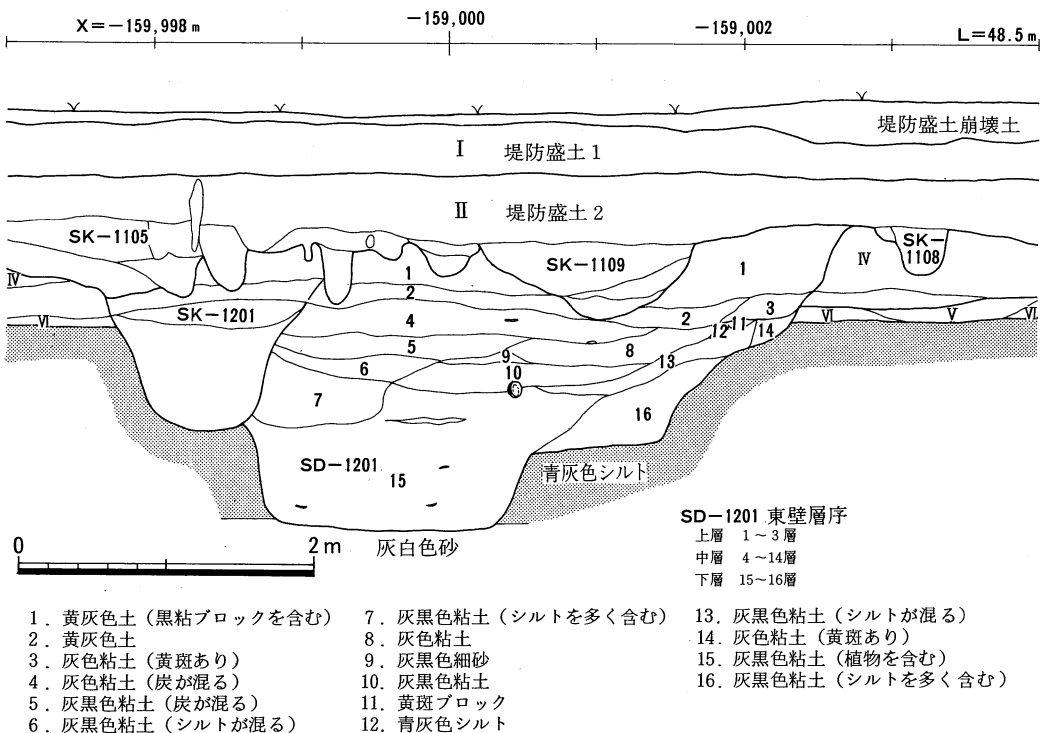
弥生時代前期の遺構には大形土坑8基、小土坑4基、ピット群、大溝2条があり、各トレンチにおいて検出している。各遺構はそれぞれのトレンチに散在しており、集中しない。大形土坑は木器貯蔵用の土坑と思われるものである。ピット群は第2トレンチの南半にみられ、住居跡の柱穴と思われるものである。各遺構の時期は前期の中葉から末で、一部には第II様式と共伴するものもある。これらの遺跡は弥生中期以降の遺構に切られているため、残存状況は悪い。

SK-2201・SK-2203

SK-2201・SK-2203は第2トレンチ中央やや南よりで検出した大形土坑である。SK-2203はSK-2201の北西側の肩を切って掘削されているが、両土坑はともに主軸が北東-南西方向にあることから、ちかい時期に掘削されたのであろう。SK-2201の規模はわからないが、長軸2m以上、短軸1m以上有するもので、深さ1mを測る長方形プランの土坑である。坑底には葦草層があり、葦草が敷かれていたと思われる。土坑の性格は不明であるが、埋土は暗灰青色微砂と灰色粘土のブロック層で一度に埋没したものと考えられる。一方、SK-2203は長軸2m以上、短軸1.7m、深さ1.1mを測る長方形プランの土坑で、規模・土坑プランもSK-2201と類似する。埋土もほぼ同質で、遺物をほとんど含んでいない。これらの土坑は今までの検出例から木器貯蔵用の穴と考えられる。時期は第I様式の新しい段階である。

SK-3203

SK-3203は第3トレンチで検出した小土坑である。土坑はトレンチの北壁に一部がかかって



第6図 SD-1201東壁土層断面図 (S = 1 / 50)

いたが、直径0.8mの円形の土坑であることがわかった。深さ0.6mを測り、土坑の断面は逆台形を呈する。土坑は坑底に植物腐植土層が薄くみられ、それより上位は灰色粘土層（最下層）、炭灰層（下層）、灰色粘土層（中層）、暗黄褐色粘質土層（上層）が堆積する。上層から下層は厚さ12～15cm程の薄い堆積である。遺物は最下層から下層にかけてまとまって土器が出土した。土器は甕が3点半完形品で、土圧によって押しつぶされた状態であった。特に注目されるのは多条沈線をめぐらした鉢と大和型甕が共伴していることで、いわゆる第Ⅰ様式と第Ⅱ様式の混在資料として取り扱われがちなものであるが、出土状況からは一括性が高い。

SD-1201

SD-1201は第1トレンチの南半で検出した大溝である。上面での幅約5m、深さ約2mを測る大規模な遺構である。溝はほぼ東西に軸をとるが、西端ではやや南西方向へ向きを変えるようである。溝の断面形態は二段の逆台形を呈し、溝の中位にテラスをもつ。溝の堆積は大きく三分層される。上層は黄灰色粘土層で、人為的な埋土と考えられる。中層は10～20cmの灰黒色粘土層等で形成される。中層においては溝の北側で溝さらえをしているようである（第6図-第4～7層）。下層は灰黒色粘土層で安定した自然堆積状況を示している。土層の厚さは1mにも及ぶ。遺物は中層と下層から多量の土器が出土した。土器は大形破片が多いが、完形になるものはない。木製品は少ないが、流水文や双頭渦文を刻んだ木製杓子の断片、丹塗板が出土している。自然遺物では獣骨やアカニシなどが下層より出土した。本溝の時期は決めたいが、中・下層の土器群から古い様相の土器を含みながらも第Ⅰ様式の後半の土器が大半を占めていることから、溝の掘削は第Ⅰ様式の前半で、第Ⅰ様式を通じて開口していたと思われる。

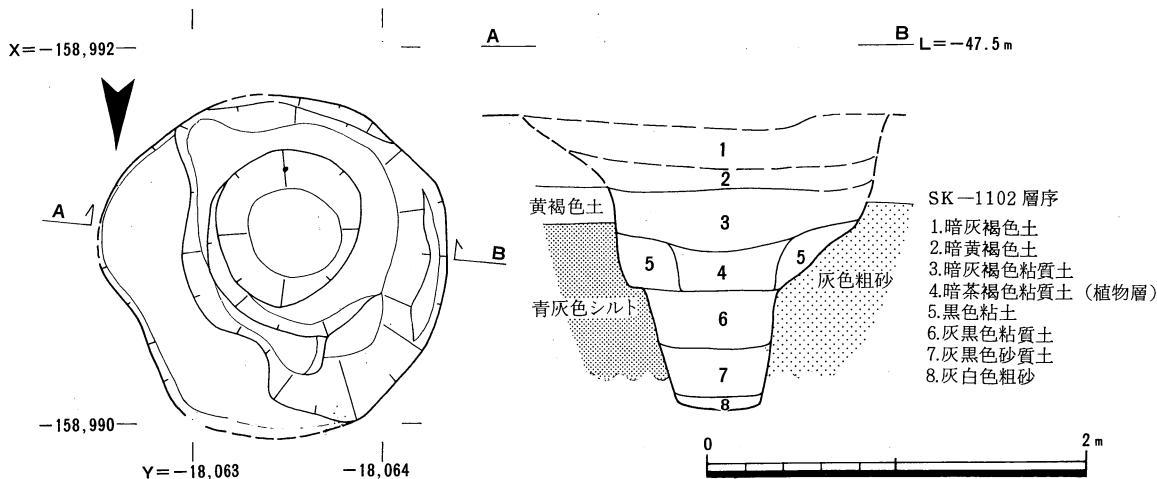
(3) 弥生時代中期の遺構

弥生時代中期の遺構は本調査において最も多く検出した時期のものである。土坑は大形・小形ともに各トレンチで、大溝・小溝は第2トレンチで、ピット群は第1・第2トレンチで各々検出している。各遺構は重複しており、またトレンチ幅が狭いこともあって各遺構の全容を知れるものは少ないが、大形土坑では井戸、小土坑では炭灰を含んだ住居跡関連遺構が考えられる。

SK-2104・SK-2108

SK-2104とSK-2108は第2トレンチのほぼ中央で検出した土坑である。SK-2104はSK-2108を切っているが、さらにSK-2104の中央部には古墳時代前期のSK-2106が掘削されており、土坑の一部は破壊されている。SK-2104は長径2.4m以上、短径2m以上の楕円形プランの土坑で、本土坑のほぼ半分を完掘した。断面は二段の逆台形を呈する。深さは1.3mを測る。土坑の堆積は厚さ10～30cm程の粘土層の自然堆積土層である。土坑中位に形成された腐植植物遺体を含む灰黒色粘土層（取り上げ第4層）とその上部の黒粘層（取り上げ第3層）からは半完形を含む第Ⅱ様式の土器を検出した。また、第4層では骨製紡錘車やヤス状の木製品も検出している。

一方、SK-2108はSK-2104の北側にあり、ほぼ主軸を同じくする楕円形の土坑である。長



第7図 SK-1102遺構平面図および土層断面図 (S = 1 / 40)

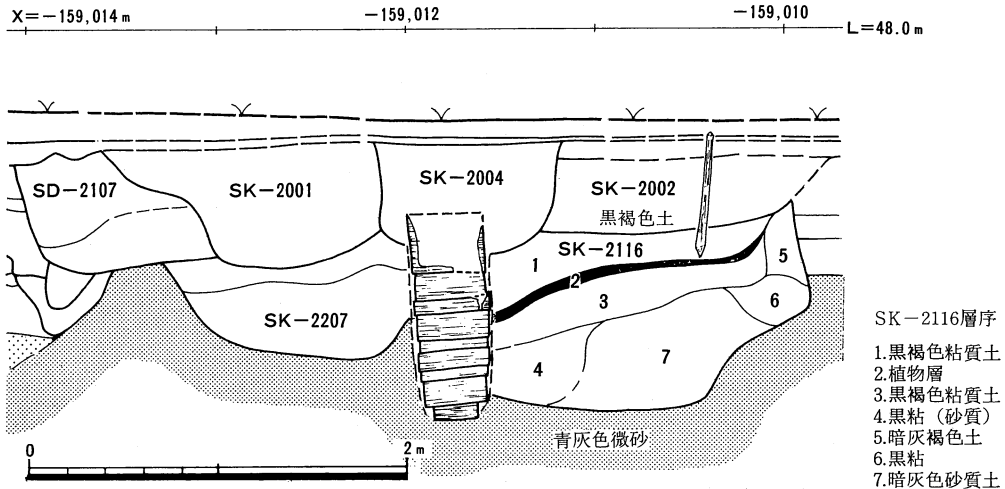
軸2.6m以上、短軸1.2m以上、深さ1.2mを測る。土坑の堆積土は砂質土と粘土の互層で、堆水状態と土坑内への土砂の流れ込みによって形成されたと思われる。本土坑の時期はSK-2104とほぼ同時期である。

SK-1102

本土坑は第1トレンチの北端で検出した土坑である。径1.8m、深さ約1.6mを測り、土坑中位でテラスを有する二段掘りの土坑である。土坑の堆積土は20~30cmの粘土・粘質土の自然堆積層で、テラス付近の堆積は植物層となる。この植物層では完形甕と手斧柄未成品各1点が出土している。また、土坑の上部では大形破片がまとまって出土している。土坑が土器廃棄穴に転用されたのであろう。土坑の下部は遺物が少なくなる。本土坑はその形態から井戸と考えられるが、機能喪失後、木棺貯蔵穴から土器廃棄穴へと機能を変化させていったと考えられる。

SK-2103

SK-2103は第2トレンチの北端で検出した土坑である。トレンチ外に土坑がひろがっているため正確な規模やプランはおさえられないが、推定長径2m、短径1.4mの楕円形プランの土坑と思われる。深さは1.3mを測り、断面形態は逆台形を呈する。土坑の堆積土は10~20cmの粘土と粘質土層によって形成されている。土坑の最下部には植物遺体を含む黒褐色粘土層が10cm堆積している。その上部は黒灰色砂質土と黒粘土層があり、土坑中位では炭灰層が堆積している。この炭灰層ではイノシシの頭骨、肩甲骨各1点、半完形の甕、石錘などの遺物が集中していた。土坑の上層からは管玉1点が出土している。本土坑は井戸とも考えられるが、平面プランが楕円形を呈していることや断面形態が逆台形を呈することから、他の性格も考える必要がある。本土坑の時期は出土土器から第Ⅲ様式後半と考えられる。



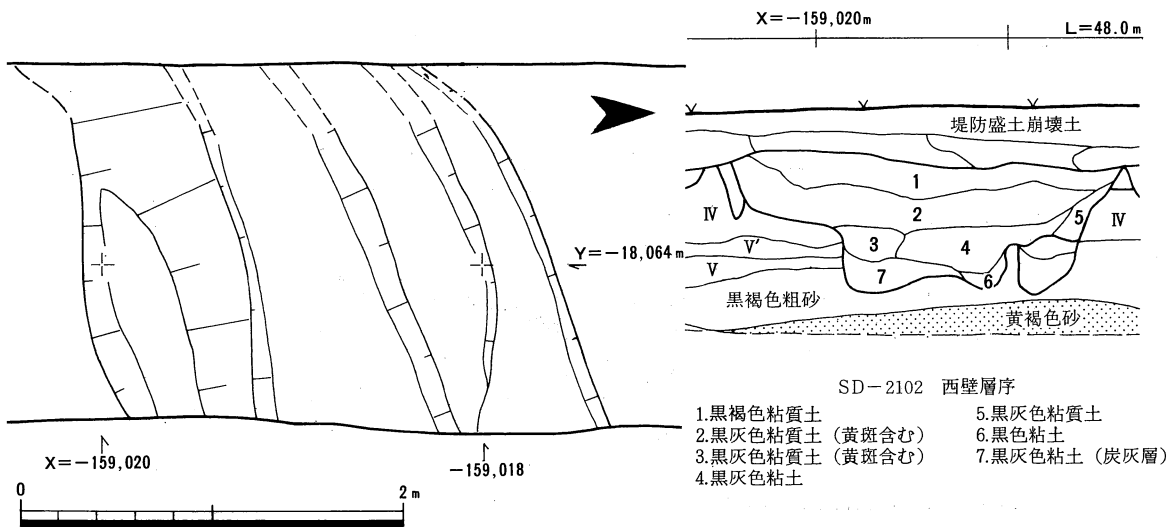
第 8 図 SK-2116と中世遺構西壁土層断面図 (S = 1 / 40)

SK-2116

SK-2116は前述SK-2103の北西約1mで検出した土坑である。土坑上面には中世遺構であるSK-2001、SK-2002、SK-2004があり、検出当初は判断できなかったが土層断面やSK-2004の掘り下げによって確認できた土坑である。本土坑は長軸2.6m、短軸2.2mを測る楕円形プランの土坑である。深さは現在1mを測るが、中世遺構に切られているため、本来1.3m程あったと思われる。土坑の堆積状況は大きく上・下二層に分かれるが、上層の黒褐色粘質土は植物層を挟んでさらに二分される。下層は黒色粘土と暗灰色砂質土で形成されている。下層では遺物は少ないが、土坑坑底よりやや浮いた状態で杓子の未成品が出土した。また、上層と下層の界では台付鉢の鉢部の完存品が、さらに植物層の上部で完形の石剣(図版27-9)を検出した。土坑は出土土器から第Ⅲ様式末と考えられる。土坑の性格については判断しがたいが、木製杓子の未成品が坑底から出土しているため、木器貯蔵用の穴、あるいは木製杓子は祭祀遺物と共伴する例の多いことから、祭祀的な土坑とも考えられる。

SD-2103

SD-2103は第2トレンチのほぼ中央部で検出した溝で、南東から北西方向に軸をもつ。検出当初は幅広い溝(SD-2103)として掘り下げたが、溝の下層では2条の小溝に分かれた。南側の小溝をSD-2103Aとし、北側の小溝をSD-2103Bとした。土層断面の観察の結果、SD-2103は両小溝の上層の堆積であることを確認した。SD-2103は溝幅1.3m、深さ0.3mを測る浅いもので黒褐色粘質土層が堆積している。本溝より水差形土器、大形細頸壺、無頸壺など完形を含む土器をA溝上部で多く検出した。SD-2103AはB溝よりやや深く大きい。A溝は幅0.7m、深さ0.7m、B溝は幅0.5m、深さ0.5mを測る。A溝ではミニチュアの無頸壺、中河内産の細頸壺、高杯杯部などが出土した。



第9図 SD-2102遺構平面図および西壁土層断面図 (S = 1 / 40)

SD-2102

SD-2102は第2トレンチ中央やや北よりで検出した大溝である。東北東から西南西に走向する溝で、溝幅2.4m、深さ0.8mを測る。溝の断面形態は二段の逆台形を呈する。溝の堆積は大きく三分層される。下層は黒灰色粘土、中層は黒灰色粘質土、上層は黒褐色粘質土、暗灰黄色粘質土である。遺物は中層・下層で多く検出した。遺物の大半は土器で完形土器は含んでいないが、大形破片が多い。中層から出土した大形台付鉢の破片とSD-2103AおよびSD-2103から出土した土器片と接合した。両溝とも溝の埋土でないため同時に溝が開いていたことを示す資料となろう。溝の時期は第Ⅲ様式後半である。

SD-2105・2106・2107

SD-2105・2106・2107は第2トレンチ北半で検出した東西溝である。SD-2105とSD-2106(A・B溝に分かれる)は溝幅0.4m程のもので、この両溝を覆うようにSD-2107がある。これらの溝の堆積土は黒褐色粘質土や灰黒色粘土等で、炭灰を多く含む層である点で共通している。この北側に隣接するSK-2103とともに第2トレンチ北半では炭灰層が多く、居住区内であったことが窺える。これらの溝の時期は第Ⅲ様式である。

(4) 古墳時代の遺構

SK-2106

SK-2106は第2トレンチの中央部やや南側で検出した径約1.5m、深さ1mの円形の土坑である。上層は黒褐色粘質土、下層は黒粘で、下層から完形甕4点、半完形2点が出土した。

SD-1101

本溝は第1トレンチ中央部やや北よりで検出した幅1.5m、深さ0.4mの東西溝である。上層

は暗茶色土、下層は黒粘で、下層よりミニチュア壺、小形丸底鉢などが出土した。

(5) 中世の遺構

中世の遺構は井戸と素掘溝に分けられる。井戸は素掘溝を除去した段階で検出された。素掘溝は第1・第2・第3トレンチで南北方向、第2トレンチ南端では東西方向が一部あり、交叉している。この素掘溝を覆うかたちで、唐古池の堤防が造られていることから池の築造は中世以降である。

SK-1001

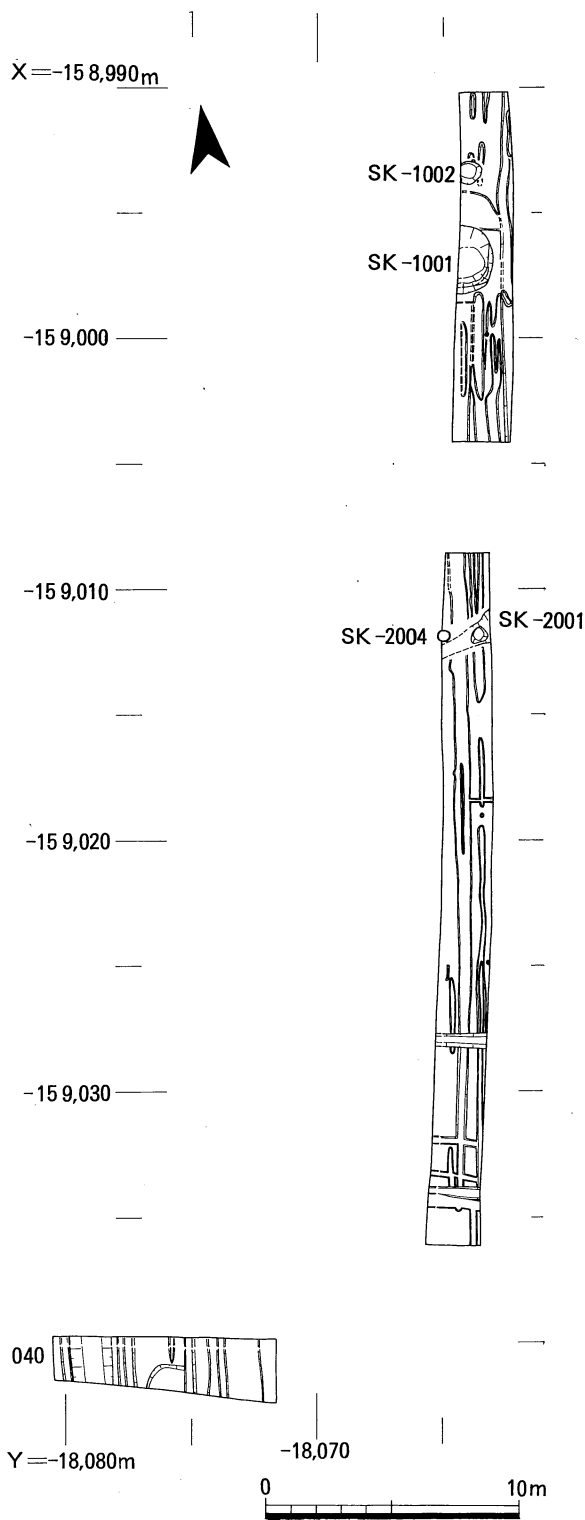
第1トレンチ中央で検出した土坑である。径2.8m、深さ1.5mを測る。土坑は最下層に植物を含んだ黒褐色粘土層があり、その上部は黒灰色粘土、黒粘と堆積する。上層は灰褐色粘質土で土坑の埋土である。遺物は少なく、瓦器、土師皿片が出土している。井戸と思われる。

SK-1002

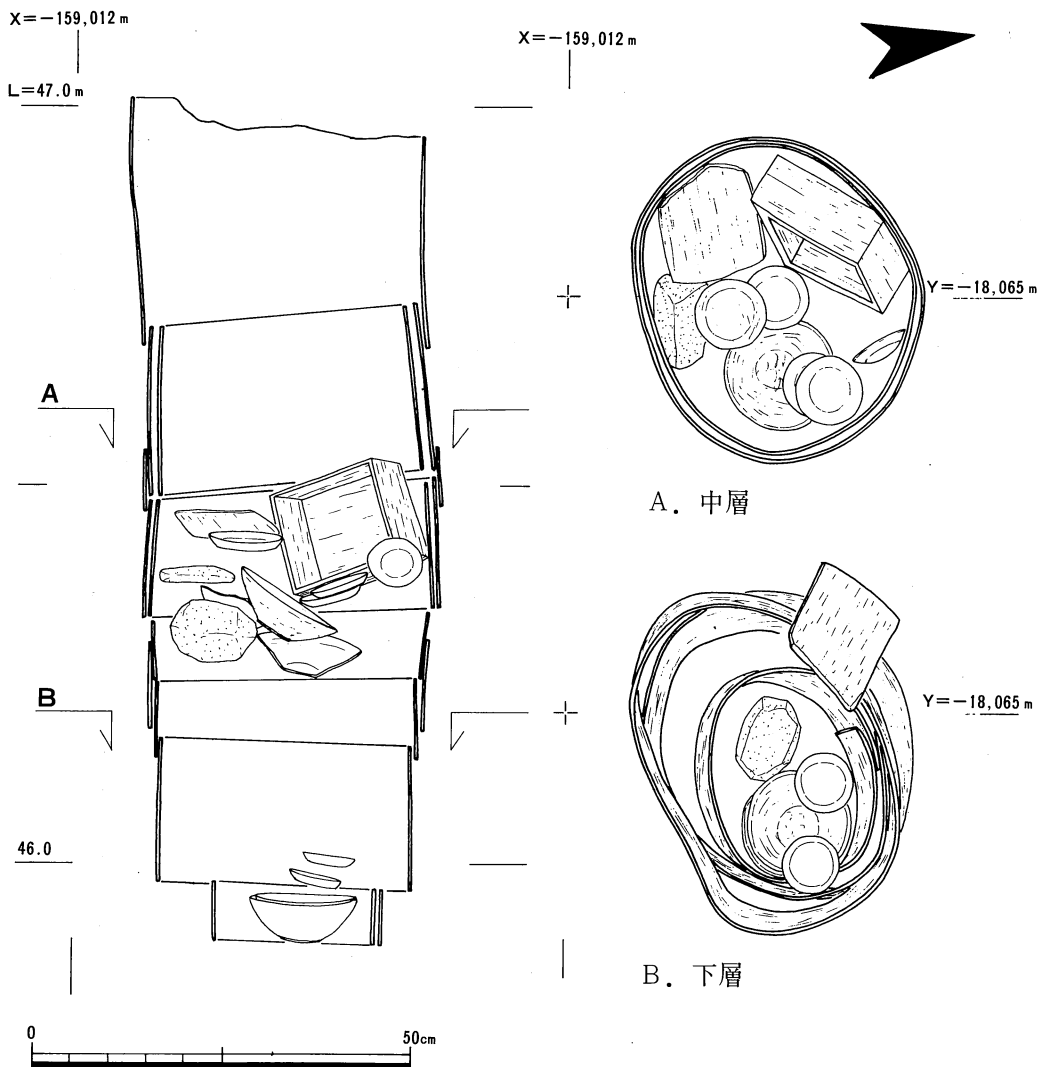
SK-1002は第1トレンチの北半で検出した土坑で、径0.9m、深さ1mを測る円形の土坑である。断面は円筒状を呈している。土坑の堆積は四層に分かれ、第1層：黒褐色粘質土、第2層：黒灰色粘土、第3層：黒褐色粘土、第4層：黒褐色細砂となる。第1層は土坑の埋土、第2～4層は自然堆積層である。第2層下位から瓦器碗が出土している。井戸と思われる。

SK-2001

本土坑は第2トレンチ北端で検出した土坑で、不整円を呈すが土坑下位は径が



第10図 第26次調査遺構平面図(2) 中世 (S=1/300)



第11図 SK-2004遺物出土状況の見とおし図及び平面図 (S = 1/10)

0.7mの円形となる。おそらく、井戸杵を抜きとったためと思われる。

SK-2004

SK-2004は第1トレンチの北端で検出した井戸である。井戸はトレンチの西側に広がっていたため拡張して掘り下げた。土坑の掘方は上部で径1 m程あるが、井戸杵が残存している部分では井戸杵ぎりぎり掘っている。深さは1.5mを測り井戸杵は8段残存していた。上から一段目はほとんど腐朽していた。八段目は径0.5mの小さい井戸杵となる。遺物は多く出土した。完形品は二段目から三段目にかけてと第八段目にまとまって出土した。上部では杵、瓦器皿1、椀2、土師皿4点、最下層では瓦器椀と土師皿が各2点出土した。その他、五段目と六段目からは横櫛が各1点、また、混在資料と思われるが、三段目で臼玉、六段目で管玉が各1点出土した。

3. 出土遺物

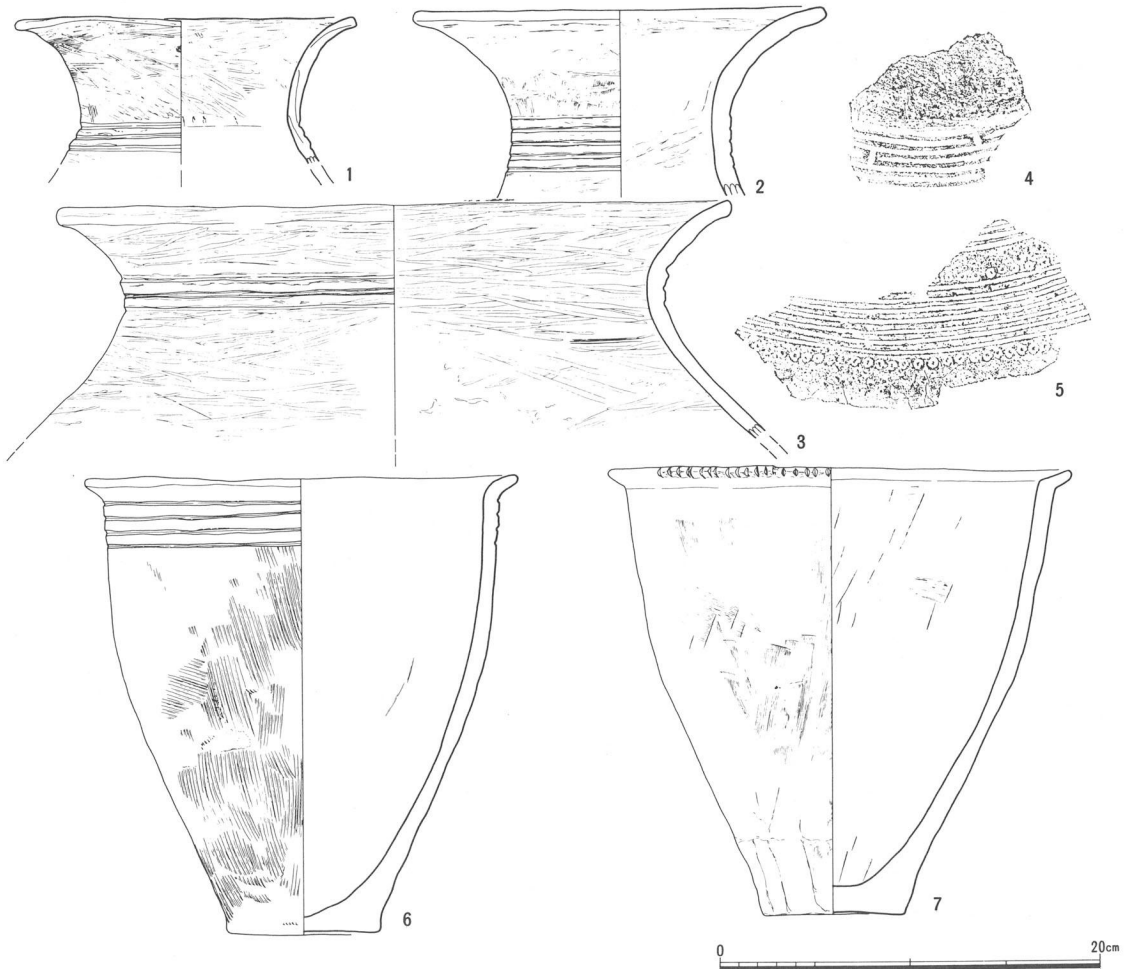
今回出土した遺物は弥生時代前期から中世に至る遺物で、最も弥生土器が多い。古墳時代後期から平安時代にかけての遺物は少ない。土器の他、木製品、石器、骨角器、金属器などの人為遺物が多いが、獣骨や種子類の自然遺物も粘土サンプルの洗浄によってかなり抽出している。

(1) 土器

土器は弥生時代前期から中期、古墳時代前期のものが多い。中世では瓦器・土師皿などがある。包含層からの二次的なものがある他、溝や土坑など遺構に伴う土器が最も多い。ここでは溝や土坑の良好な資料を中心に記述する。

SD-1201出土土器（第12図）

壺 1～5は広口壺である。1・2は口縁部で頸部にヘラ描沈線をめぐらす。1は最下段の沈



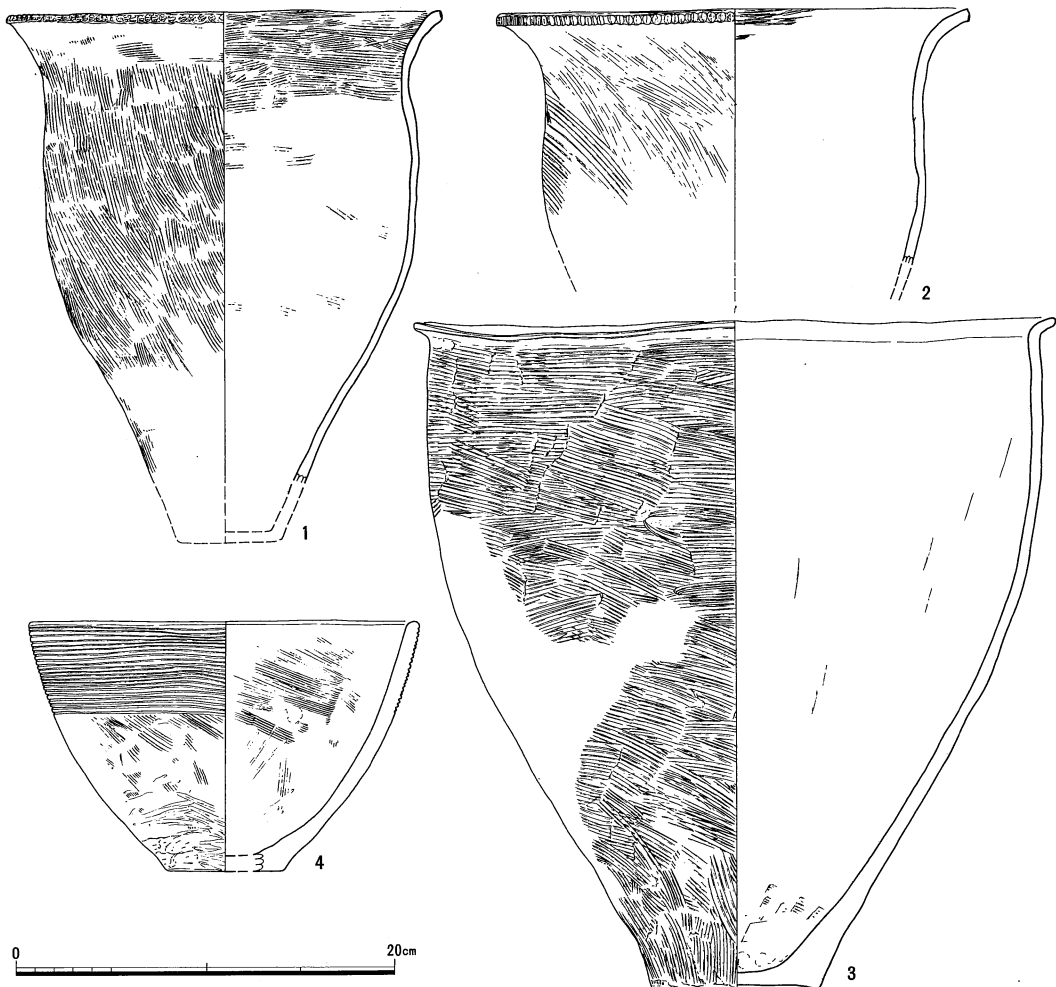
第12図 SD-1201出土土器（S = 1 / 4）

線部より下（胴部側）を低くし、段としているのに対し、2は最上段の沈線（頸部側）をハケで低くし、段としている。1には一つの紐孔がある。2は器壁の厚い土器である。3は大形壺で、頸胴部界に三条のヘラ描沈線をめぐらす。沈線の上下は低くし突帯をなす。4・5は壺胴部である。4は幅の広い突帯をなし、突帯上には六条のヘラ描直線を施した後、区画線を入れ流水文とする。5は胴部に二帯のヘラ描直線文を施し、下段の直文帯の上下に竹管部をめぐらす。

甕 6・7は中形の甕である。6・7ともに底部からゆるやかに心反する体部を有し、口縁部は短く屈曲する。6は口縁部下に四条のヘラ描沈線をめぐらす。外面には粗いタテハケを施す。7は無文で内外面には細かいハケを施す。6・7の外面には煤、内面には炭化物が付着する。

SK-3203出土土器（第13図）

甕 1・2は中形甕、3は大形甕である。1・2は口縁部が大きく外反し、体部はあまり張ら



第13図 SK-3203出土土器（S = 1 / 4）

ない形態で口縁部の屈曲はゆるやかである。1は外面と口縁部内面にフレキシブルな細いハケが施された後、ナデ調整によって消される。口縁部にはヘラによる刻目が施される。2は外面に細いタテハケを施した後、口縁部を斜位方向にハケをおこなう。また、内面は口縁部から体部上端にかけてヨコハケを施し、口縁端部にはハケ状工具による刻目をつける。大和型甕の特徴をもつ。3は口縁部が短く外反する甕で、外面には横位からナナメ方向のハケを施す。内面は丁寧なナデ調整をおこなう。

鉢 4は碗形の小型の鉢である。口縁部は直口し、端部は丸くおさめる。体部上半にはヘラによる直線文を二一条めぐらす。外面はナナメハケの後、ミガキを施す。底部側面にはケズリがみられる。内面もハケ後、ミガキを施している。

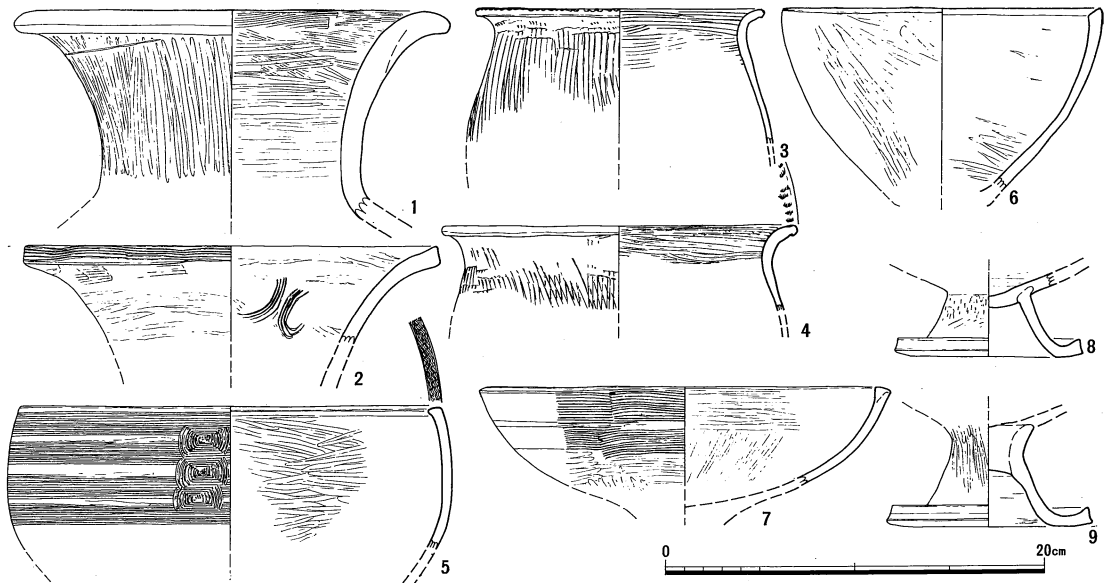
SK-2104出土土器 (第14図)

SK-2104の土坑からは量的には少ないが良好な第II様式の土器が出土した。第14図-1・3・7・8は上層(遺物取り上げ第2・3層)、他は下層(同第5層)より出土した。

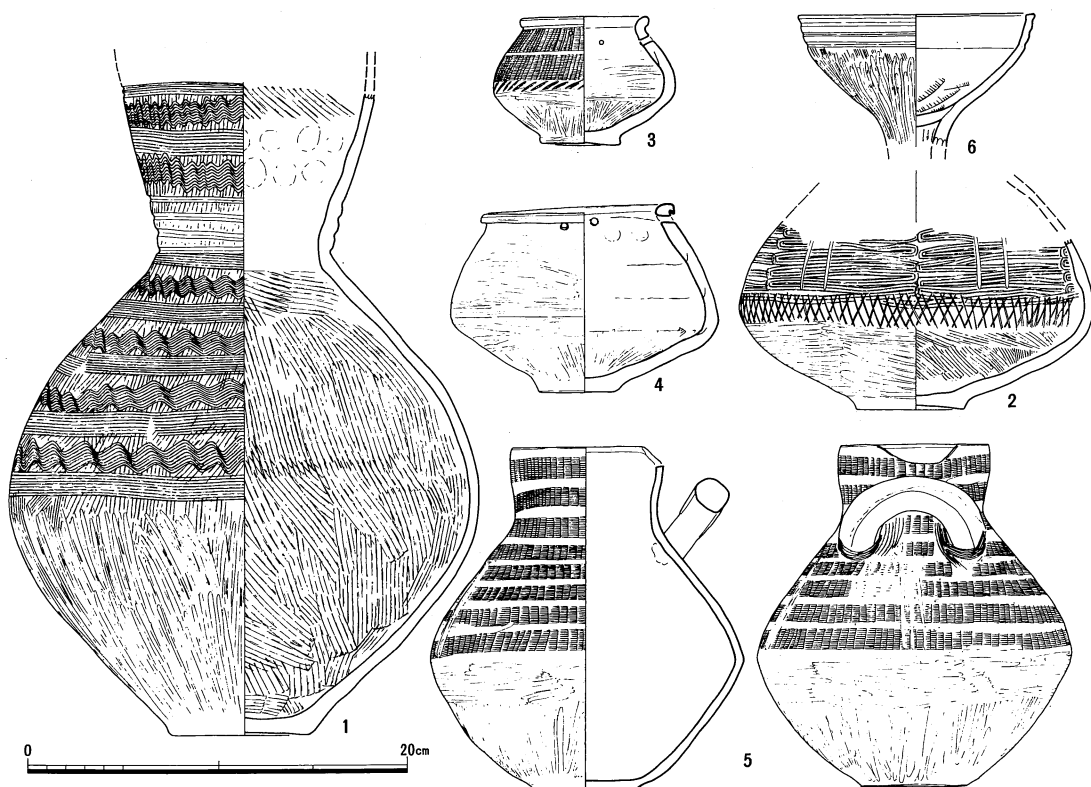
壺 1は広口壺である。口頸部はゆるやかに外反し、口縁端部は丸くおさめる。内外面にはミガキがみられる。2は広口長頸壺で、口縁端部に楕円直線文がめぐらされる。内面にはX字状の文様が楕円状工具によって描かれている。内外面にはミガキがみられる。

甕 3・4は外面に粗いタテハケ、口縁内面にヨコハケを施す大和型甕である。口縁部は下方へ巻きこむ。端部はハケ状工具による刻目を施す。

鉢・高杯 5・6は鉢、7~9は高杯である。5はやや内湾する鉢で、擬似流水文を描く。6もやや内湾する鉢で、端部は面をもち無文である。7は浅い碗形の杯部で楕円直線文がみられる。8・9は高杯脚部で、裾部は肥厚し強いヨコナデが施される。8にはケズリがみられる。



第14図 SK-2104出土土器 (S = 1 / 4)



第15図 S D-2103出土土器 (S = 1 / 4)

S D-2103出土土器 (第15図)

S D-2103からは完形土器を含む多量の土器を検出した。第15図-1・4・5は上層の大溝であるS D-2103から、2・3・6は下層の小溝であるS D-2103 A溝から出土した。上層は大形破片が多く、接合できるものもあるのに対し、下層は土器量が少なく、小片が多い。

壺 1は大形の細頸壺で口縁部を欠くほかほぼ完存するものである。やや縦長の胴部に内湾ぎみに立ち上がる頸部がつく。外面は全体を粗いハケ調整をおこない、胴部下半はケズリ後ミガキを施す。頸胴部界と口縁部には凹線がみられる。また、頸部と胴部には櫛描の波状文と直線文が描かれる。内面にはハケ調整が残る。2は小形細頸壺と思われる。胴部のみ完存する。下膨れの胴部で、胴部上半に櫛描流水文が描かれている。流水文の櫛状工具は幅4mmの細いもので、縦方向に六分割の流水文を描く。各々の流水文帯の中央には二条の縦位の暗文(ミガキ)をいれる。また、文様の最下段にはヘラによる針格子をめぐらす。3・4は完形の無頸壺である。3は扁球形の体部に短く外反する口縁部がつく。外面には二帯の櫛描簾状文、列点を描く。他は内外面にミガキを施す。4は口縁部を下方へ折り返す。無文で内外面にミガキがみられる。5は水差形土器の完形品である。外面は櫛描簾状文を八帯描き、四方に三条の縦位の暗文をいれる。

高杯 6は椀形の高杯である。口縁部に三条の凹線をめぐらす。外面はケズリ後ミガキを施す。

SD-2102出土土器（第16・17図）

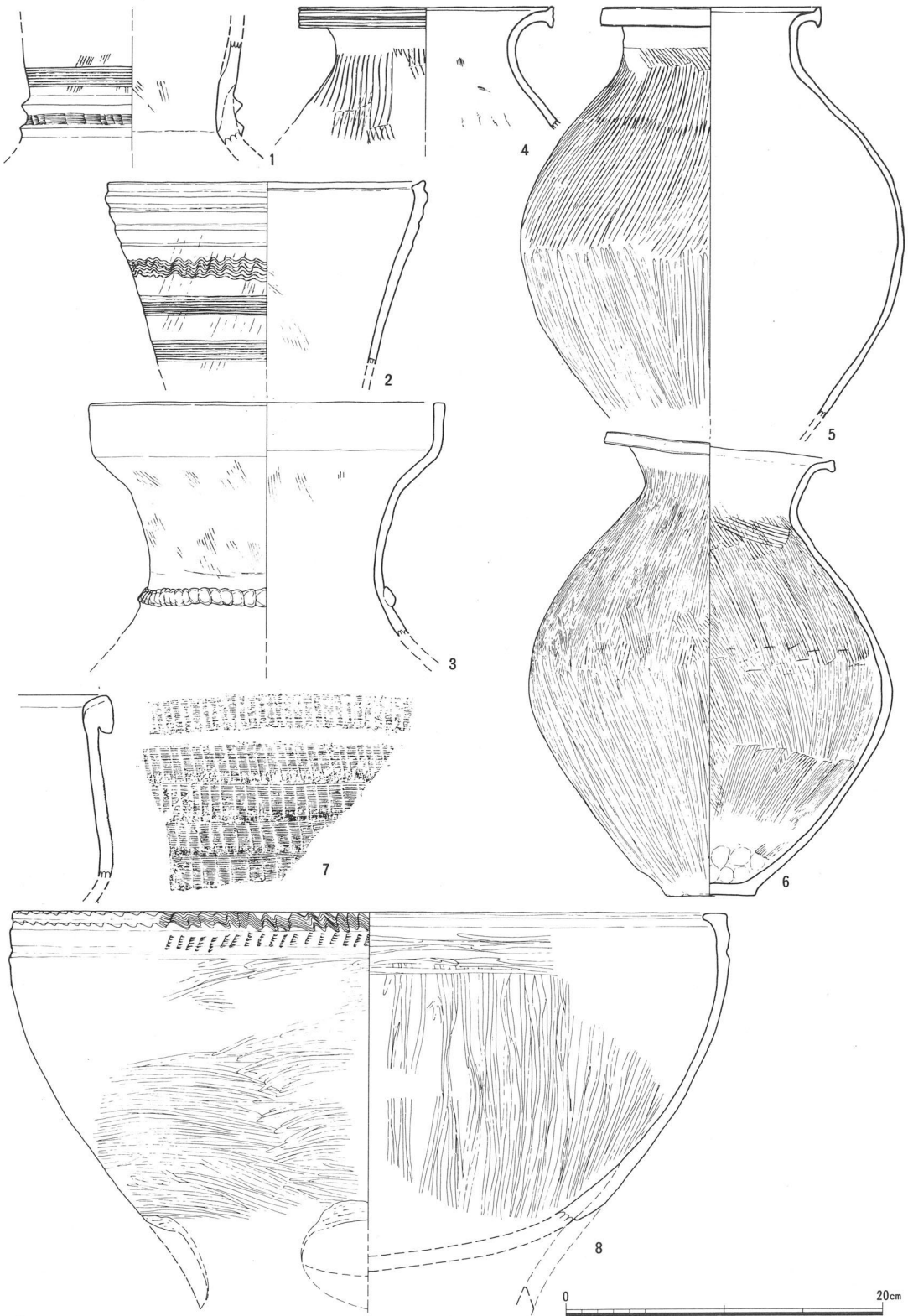
SD-2102からは完形土器は出土していないが、大形破片がまとまって上層・中層より出土した。下層は土器量は少ない。2・4・7は中層出土、3・8は下層出土で他は上層から出土した。

壺 1・2は大形の細頸壺である。1は頸部の下端に二条の貼り付け突帯をつけ、突帯間に櫛描簾状文、突帯の上部に直線文を配す。2はやや広口になる口縁部で内湾ぎみに立ち上がる。口縁端部は内側へ突出する。口縁部は四条の凹線をヨコナデ手法によってつけ、その下段を櫛描波状文と直線文を配す。内面はヨコナデとナデによってハケが消される。3は受口状の短頸壺である。頸部は外反し、口縁部は直立ぎみに立ち上がる。口縁端部は面をもつ。頸部と胴部の界には一帯の粘土紐を貼り付け、指頭による押圧を施す。口縁部にヨコナデ手法がみられる他、内外は丁寧なナデ調整である。4～6は無文の広い壺である。4は口縁部の発達した土器で、端部は上下に肥厚し、三条の擬凹線をめぐらす。内外面は粗いハケを施す。5も4と同じ口縁部が発達したものであるが、端部は文様をもたない。口縁部は強いヨコナデ手法がみられる。外面は胴部上半をハケ調整、下半はケズリ後ミガキ調整をおこなっている。胴部下半には煤の付着がみられる。内面は丁寧なナデ調整である。6は口縁部がわずかに上方へ肥厚するのみで、4・5に比してあまり口縁端部は発達していない。内外面は細いハケが施されているが、胴部下半はミガキによって仕上げられている。底部側辺にはナデがみられ、ミガキが消されている。

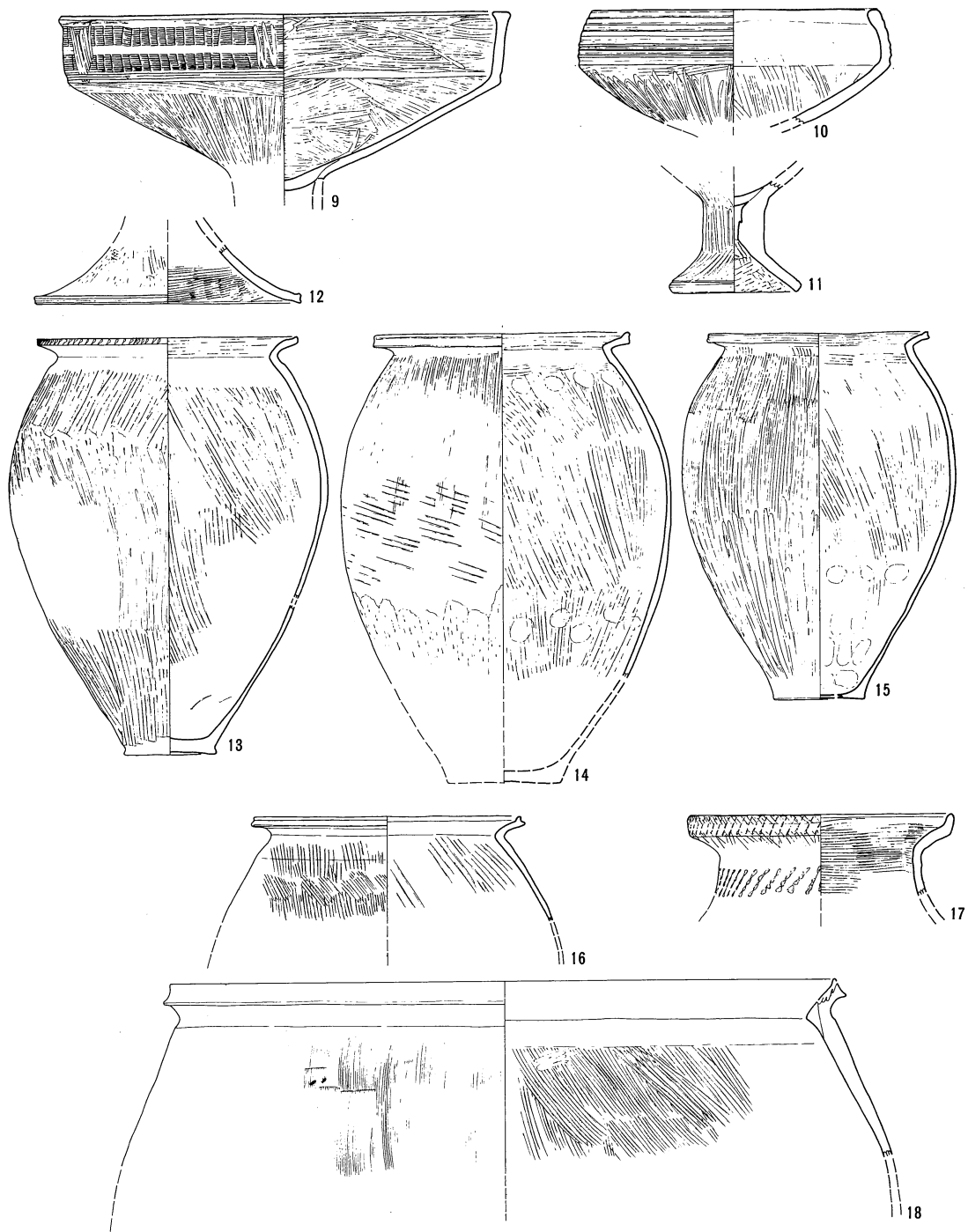
鉢・台付鉢 7・8は大形の鉢である。7は口縁部を折り返し、幅の広い突帯状をなす。外面には全面に櫛描簾状文がめぐらされる。櫛状工具は幅2.3cmと幅の広いものを使っている。口縁部の簾状文上には刺突文がみられる。内面の一部に粗いハケが残るが全体にミガキをおこなっている。形態・文様から中河内産かと思われるが、胎土はやや異なる。8は台付の大鉢である。椀形の鉢部に脚台がつく。口縁部は内湾し、端部は内方へ突出する。口縁部は二条の凹線がめぐり、上部の凹線上には櫛描波状文が重なる。外面には横位のミガキが施される。内面は縦位のミガキ後、口縁部ちかくを横位方向に磨く。脚台部は欠失しているが、脚台とは連続成形で底部を円盤充填している。円盤充填ちかくには円孔を穿ち、透孔としている。9は中形の台付鉢である。鉢部は上方へ立ち上がり口縁部をもつ。端部は内方へ突出する。口縁部の外側は折り返しをもたない。二条の櫛描簾状文がめぐり、簾状文上の五カ所に縦位の暗文を施す。また、口縁部下の屈曲部分には一条の凹線がめぐり、脚台部には円盤充填がみられる。内外面は丁寧なミガキを施す。

高杯 10は内行する口縁部の高杯である。外面には不揃いな凹線文が全面にめぐり、底部ちかくはハケ後ミガキをおこなう。11は柱状の脚部で、円盤充填がみられる。内面にはケズリが残る。

甕蓋・甕 12は甕の蓋である。外面には一部ケズリがみられる。内面には煤が付着する。13は口縁部に刻目をいれ、外面は下半をケズリ後ミガキ、上半はハケ調整をおこなう。大和・瀬戸内折衷型甕である。14～16は口縁部がハネ上げとなり、内外面は細いハケを施す。14にタキが残る。18は大形品である。これらは瀬戸内系甕である。17は近江産の甕で、櫛描列点がみられる。



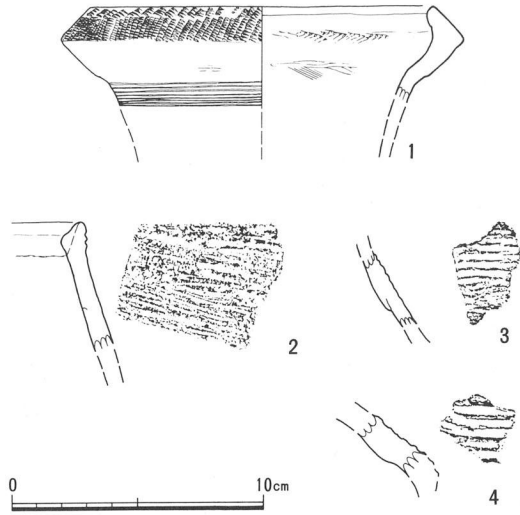
第16图 S D-2102出土土器(1) (S = 1 / 4)



第17图 SD-2102出土土器(2) (S = 1 / 4)

搬入土器（第18図）

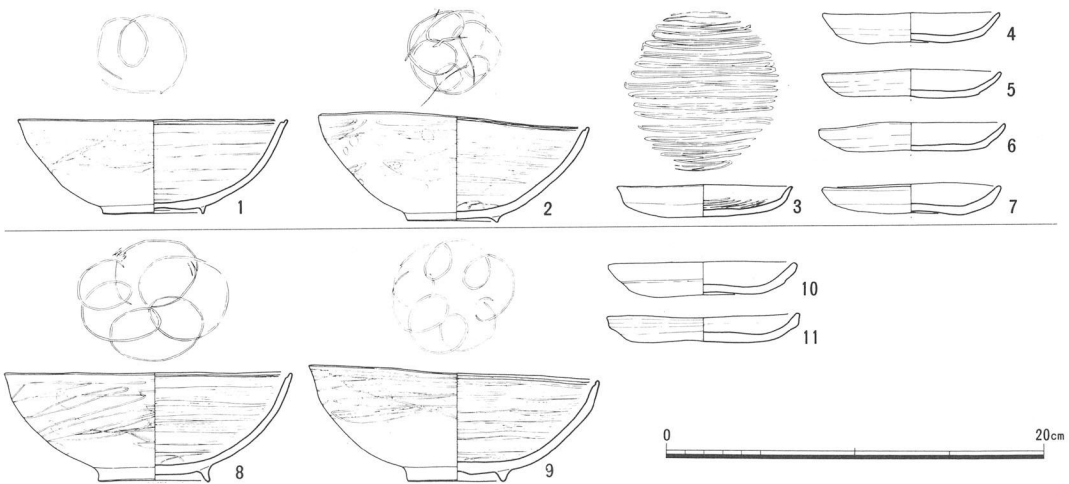
本調査においては伊勢湾沿岸地域の土器を数点確認している。1は細頸壺の口縁部で、外反する頸部に内側へ屈曲する口縁部がつく。口縁部の外面には櫛状工具の刺突による列点がめぐる。また、頸部には櫛描直線文が施される。胎土については明らかでない。2～4は内傾口縁土器であるが、4は厚口鉢かもしれない。2・3は長胴形のタイプで、2は禾本科植物による条痕と思われる。3・4は貝殻によるものであろう。4は器壁が厚くなる。1は包含層、2はSK-2202、3はSK-2106、4はSK-2103出土である。



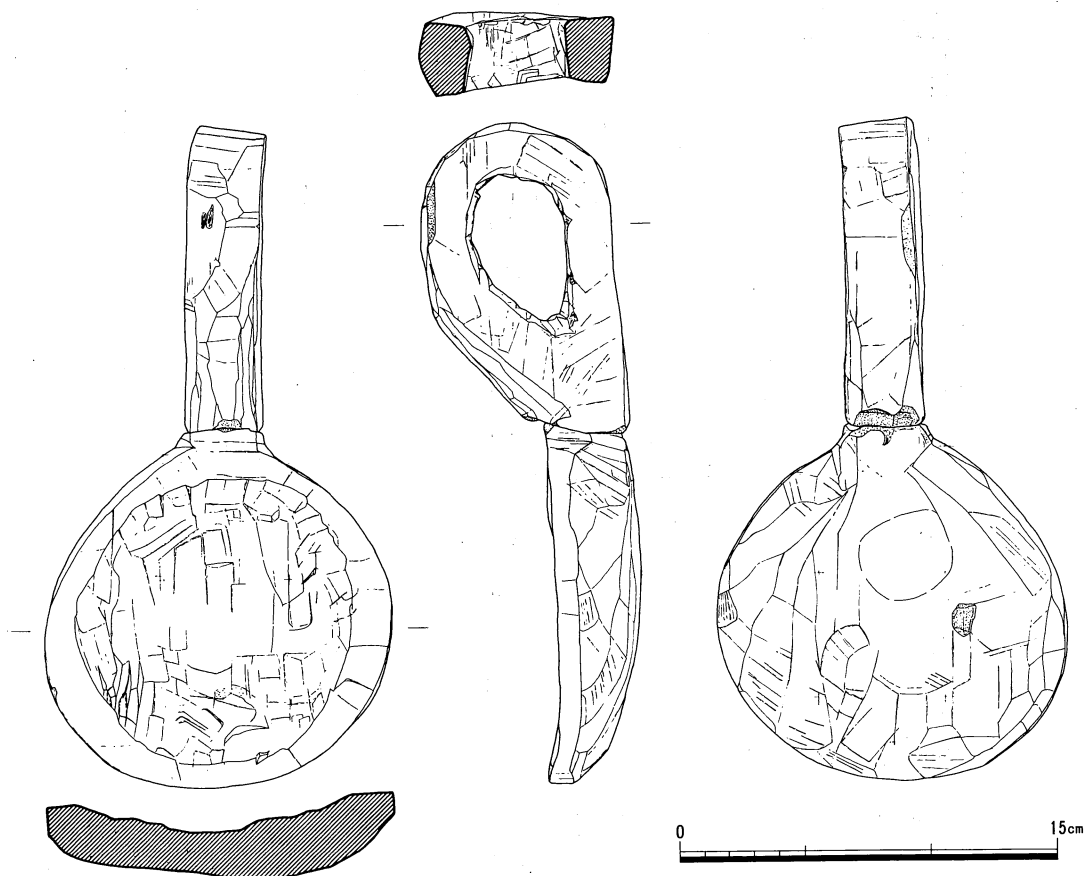
第18図 搬入土器実測図及び拓影（S = 1 / 3）

SK-2004出土土器（第19図）

1～7はSK-2004中層、8～11は下層から出土した。中層と下層では若干の型式差がみられる。瓦器碗では1・2は8・9に比べ一回り大きさが小さくなる。また、高台においても1・2は小さくわずかな粘土を貼り付けるが、8・9は大きく突出させている。また、内面の輪状暗文も1・2は簡素化される。3は瓦器皿で、内面に平行線の暗文がみられる。土師皿では、形態的にわずかに4～7の方が10・11より小さいが、あまり変化はない。口縁部と底部の界にみられる段は10・11の方が明瞭である。



第19図 SK-2004出土土器（S = 1 / 4）（1～7：中層、8～11：下層）



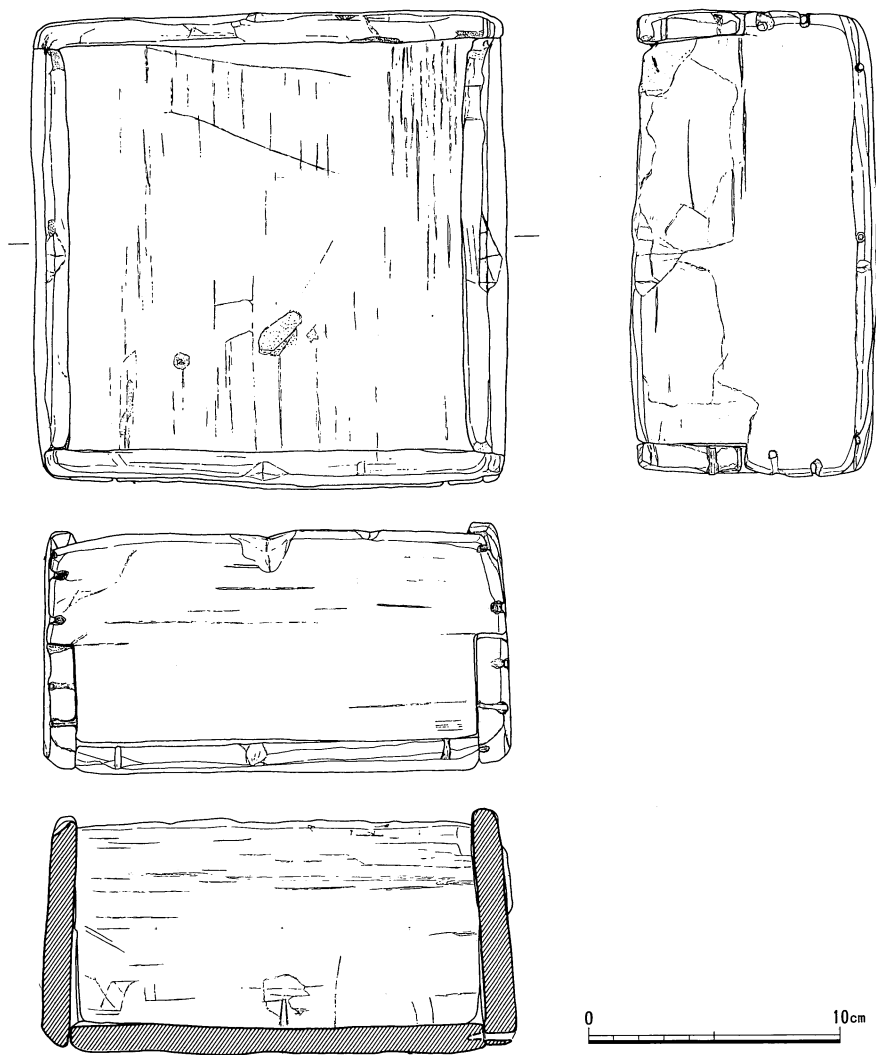
第20図 SK-2116出土木製品 (S = 1 / 3)

(2) 木製品

第26次調査において、木製品は遺構数に比べ少なく他の集落内部の調査と同じ様相を示している。製品は弥生時代前～中期の土坑や溝、中世の井戸などから出土している。農耕具と思われるものは確認していない。未成品も少なく手斧柄と杓子各1点を検出したただけである。弥生前期の土坑からは建築部材(図版24-2)を確認している。中世の井戸では枅や横櫓が出土した。

杓子未成品(第20図)

第20図はSK-2116の最下層から出土したもので、完存品である。扁平な円形の身に縦の環状の把手がつく。柄は身に対して水平にとりつく。環状の把手は上方に突出し、底面は安定している。把手の断面は長方形にちかく、表面には粗い加工痕を残すところから、断面形態を丸く仕上げる過程と思われる。また、身は内側に明瞭なノミの痕跡、外側に粗い加工痕が残っている。内側の縁は水平に整えており、外形もほぼ円形を呈していることから、外縁部の整形はほぼ終了していると思われる。身の内側は深さ1.2cmほど削り込んでいるもので、まだ、薄く仕上げるものであろう。このようなことから、最終工程を残している未成品である。全長26.4cmを計る。



第21図 SK-2004出土木製品 (S = 1 / 3)

枡 (第21図)

第21図はSK-2004の井戸の中層から出土したものである。正方形の木箱状のもので枡と思われる。底板と四枚の側板より構成されている完存品である。底板は長軸18.8cm、短軸16.3cmを計り、長軸側に側板(上側を凸形にしたもの)がのる。逆に短軸側は側板(下側を凸形にしたもの)が外側につく。このことから、底面の内側はほぼ16.3cm四方となる。側板は凸部と凹部を互いに組み合わせ、木釘を二本ずつ打ち込み固定する。また、側板と底板の固定も三本づつの木釘を用いている。側板の内側の高さは8.0~8.3cmを計る。枡の外表面は全体に磨耗が激しく、特に縁辺は丸くなっている。側板上端中央は四枚とも外側が磨耗しており、注目される。

杓子（図版24—3）

本杓子は弥生時代前期のS D—1201から出土した断片である。身の一部を残すのみで把手は欠失しているが、身に対して斜めに把手がつくようである。身の外面には文様が刻まれている。文様を復元すると、縁辺部と身の中央部に二～三帯の流水文、そして、流水文に囲まれた内部を充填するように双頭渦文が両側に刻まれる。

平斧柄未成品（図版24—1）

S K—1102から出土した完存品である。二又に分岐した部分を使っている。斧部は上面はほぼ平滑になっているほかは粗い加工痕を残しており、特に台部の先端と末端は切断痕が明瞭である。台部の整形をかなり残している未成品である。台部の長さは26.2cmを計る。

横櫛（図版26—1・2）

横櫛はS K—2004の井戸枠の上より五・六段目から出土している。櫛歯が細いもの（1）と粗いもの（2）の二種あるが、いずれも断片である。

(3) 石器

石器は各種打製石器から磨製石器まで出土している。時代的には弥生時代前期から中期のものが多い。完存品は少なく、大半は破片となっている。出土遺構は土坑・溝・包含層などでほとんどが廃棄等による二次資料である。第2トレンチ南端ではサヌカイト大形剥片・小剥片など集中地区も検出している。磨製石器は他の調査地点に比して量的に少ない。

打製石器（図版27・28）

石鏃 石鏃は各種形態がある。図版27—1はS D—1201、2はPit—2106、4はS K—2113、6はPit—1167、7はS K—2103、8はS K—1109出土で、他は包含層である。6・8は弥生中期、他は弥生前期に所属すると思われる。1・5は円基、3・4は凹基、6・7は凸基である。8は石鏃とすべきか問題で、両側辺に抉りを入れ、基部側も三角形に整形する。

石剣 図版27—9～15は石剣である。9～11は完形で、基部より上部は側辺に細かい調整剥離がみられる。1・2は基部に刃潰し、柄部をこしらえている。3は先端部中央を磨いている。12・13は先端部である。15は小形品で尖頭器とすべきかもしれない。9は全長19.4cmを計る。9はS K—2116、10はS K—3105、14はS K—1109出土で、他は包含層等である。

石錐 図版28—1～5は石錐である。1はS K—2116、4はS K—2103、5はS K—2102出土で、他は包含層等である。1～3は頭部の一部にも調整がみられる。3は先端部を欠く。4と5は頭部を失う。いずれも身側辺に刃潰れがみられ、回転による磨滅と考えられる。1・3と2・4・5とでは身の幅が異なり、前者の方が太い。5は身の現長が5.8cmを有する。

剥片 剥片は多量に検出しているが、第2トレンチの南端では剥片の集中区が検出され、図版28—aはその一部である。総重量約750gを計る。石核及び大形剥片は数点で、二次加工のあるものはない。大半は1cm前後のチップ片である。また、表面に琢磨痕のある剥片も数点ある。

磨製石器（図版29・30）

石庖丁 石庖丁は流紋岩製はほとんどなく、緑色を呈する片岩が大半を占める。また、完形品はなく、全て破片となっている。図版29-1～4は石庖丁の未成品である。1・2・4は形態的にはほぼ整えられ、縁辺部の細い調整がおこなわれている。身の厚さが薄くなり、琢磨前の資料であろう。3は形態的にかなり大きく、厚さも1.4cmほどを計り厚い。成形段階のものである。4はSD-2108出土である。

5～10は石庖丁の整品である。5～8は直刃半月形である。全て片刃で、一端を欠く。9は長方で直刃であるが、両端を欠く。刃は両刃である。背部ちかくは紐孔を二孔穿っている。10は大形石庖丁である。台形を呈し、内湾刃である。刃は両刃である。5はSK-1115、6・8はSK-2104、7はSD-2102、9はSK-2116、10はSD-2111から出土している。

石斧 図版30-7・8は扁平片刃石斧である。7は基部を一度欠失した後、さらに磨き、基部として整える。刃部幅2.7cmを計る。8も基部を欠くが、琢磨により整える。本品の右側刃には擦り切り技法がみられ、表・裏両面には溝状の擦り込みと中央部に分割時の折れ面が看取される。折れ面はさらに琢磨される。基部についても欠失でなく、擦り切り技法かもしれない。7はSK-2103出土、8はSK-1102出土である。

図版30-9～13は大型蛤刃石斧である。いずれも断片のため、全体はわからない。9～11は一側刃のみである。10はSK-1108、11はSD-2111の出土である。13はSD-1201の前期の溝より出土したものである。基部を欠くが刃部はほぼ残り、大形品となる。基部側は刃部幅よりわずかに細くなるようである。

磨製石鏃 図版30-5はSD-2004（中世素掘溝）から出土した磨製石鏃で、混入資料と思われる。基部は欠失している。やや内湾ぎみに先端にいたる形態で、身の中央に稜線をもつ。稜線上には縦に二孔を穿っている。一孔目と二孔目の間から身中央の稜線は二又に分かれ、中央部に平坦面をつくる。身の縁辺は両刃に研ぎ出している。

(4) その他の遺物

玉類 玉類の大半は二次的な中世遺構から出土している。弥生時代のものとしてはSK-2103から出土した長さ5.3mm、径2mmの管玉がある。図版30-1は管玉、2・3は臼玉、4はガラス小玉である。いずれも中世遺構等出土で、時期はわからないが、古墳時代の所産のものであろう。

鉄鏃 図版30-6はSK-2004から出土した無茎の鉄鏃である。表面は錆と砂粒の付着が激しいが、厚さ2mm、現長6.7cmを計る。

骨牙製品 図版31-1はSK-2104から出土した骨製紡錘車である。一部欠損しているが、径4.7cm、厚さ0.9cmを計る。中央部の孔径は0.8cmである。図版31-2・3は用途不明品である。2は一面に二条の刻線を入れる。3はイノシシの牙で切断痕がみられる。

4. まとめ

唐古・鍵遺跡第26次調査は昨年度の第23次調査に引き続いたものである。この二件の調査と昭和11・12年におこなわれた唐古池内部の発掘成果を総合すると、遺跡北半部分の様相がかなり明らかにされよう。しかし、遺構・遺物の密度が高く、分析まで進展していないことから、本概報では、現状での事実と問題点を整理し、まとめとしておきたい。分析結果は正式報告に譲ることにするが、ここでは遺構・遺物に分け、整理する。

(1) 遺 構

1. 本調査地は第1次調査の遺構分布状況とを合わせると、南東から北東にのびる微高地上に立地していることが判明してきた。第2トレンチ付近が高く、除々に北側へ低くなっているのが遺構面の高さから知れる。しかし、弥生時代中・後期段階には、本調査地内ではほぼ平坦になってくる。これは、池の北半部分において中・後期段階の遺構が点在することからも状況的に合致してくる。ムラの居住区の拡大としてとらえられよう。

2. 弥生時代前期における遺構としては、土坑・大溝・柱穴群がある。土坑は大形土坑が多いが密度的には疎である。この大形土坑は木製品貯蔵用土坑と思われるが、木製品は出土していない。大溝は第1トレンチで検出した。幅6m、深さ2mを測る大規模な溝で、延長部分は短い。唐古池の南西コーナー付近に走向しそうである。時期は第I様式を通じて開口していたと思われる。このような大溝は第1次調査においては検出されておらず、また、第1次調査検出の前期土坑との関係が問題である。溝の規模から前期段階の環濠とも考えられるが、溝の外側(北側)にも土坑が存在することになり、区画溝の可能性もでてくる。本溝の性格については今後の調査をまちたい。とにかく、唐古池の南半は前期段階において遺構密度が高く、微高地上の居住区であることを示している。

ここで、一つ問題は第1次調査で検出された中央砂層、南方砂層であるが、第26次調査においては無遺物砂層として検出した。両砂層が弥生前期に存在していたか、それとも弥生以前の砂層堆積なのか、ムラの成立に大きくかかわる問題であり、さらに分析を必要とする。

3. 弥生時代中期の遺構は第II・III様式が主体となる。特に第III様式後半は遺構・遺物ともに多い。遺構としては土坑、大溝、小溝、柱穴群がある。土坑には井戸がある。また、小土坑が多く、炭灰層を含むものもあり、住居跡関連遺構であろう。第2トレンチで検出された小溝も同様な性格のものと考えられる。大溝はSD-2201、2202、2203、2111の4条を検出した。これら大溝群が第1次調査で検出されていないため、どのようにめぐるのがかわからないが、環濠ではなく、区画溝等の性格であろう。

4. 弥生時代後期については遺構は少数で、その内容は定かではない。古墳時代前期の遺構は溝と土坑(井戸)を検出した。すべて布留式の時期であり、第1・23次調査においても遺構が点在していることから、唐古池中央部付近に居住区が推定できそうである。

5. 中世の遺構も多く検出した。第1・第2トレンチでは井戸を4基検出し、この付近が居住区にあたると思われる。そのなかには曲物の井戸枠をもつ井戸もあり、豊富な遺物が出土した。

『大乘院寺社雑事記』には「唐古東」なる名があり、唐古周辺には「唐古」・「唐古東」・「唐古南」の三氏が存在していたようである。「唐古」については第8・11・14・16・19・20・22次の各調査で検出された館跡が推定される。いま、唐古池の東側で検出された一連の中世遺構についてはその規模と時期から「唐古東」の館跡の可能性が最も高そうである。今後、規模と構造を明らかにしていかなければならない。

井戸等の遺構を切るように中世素掘溝が掘削され、その小溝を覆うように唐古池の堤防がつくられている事実から、唐古池の築造は早くても中世末期以降であろう。館の廃絶→耕作地→池という土地利用の変遷が判明した。したがって、唐古池が「韓人池」という可能性は極めて薄くなった。

(2) 遺物

1. 今回の調査においても土器が遺物の中で最も多かったが、良好な一括資料となる土器は少なかった。第Ⅲ様式の資料が多く、SK-1102、SK-2104、SK-2108が第Ⅲ様式古段階、SK-2103、SK-2116、SD-2102、SD-2103が新段階の資料となる。また、第Ⅱ様式ではSK-3203、SK-3109がある。

SK-3203は第3トレンチで検出した小土坑で土器量も少なかったが、大和型甕の良好な資料を得た。これは多条沈線の鉢と共伴するものである。大和型甕は口縁部が発達し、細条のハケを外面と口縁部内面に施したもので、内面のハケは口縁部より体部上半までの広い範囲に施されている。大和型甕の初現的な形態と思われる。また、大和型に類似したものでハケ調整がやや異なるものも含まれており、第Ⅰ様式からの甕の変化を考える上で重要である。

2. 木製品では弥生時代前期の杓子が注目される。杓子は断片であるが、身の外側には流水文と双頭渦文が陽刻されているものである。前期の流水文はよく木製品にみられるが、双頭渦文は少なく、また、文様構成の点からの貴重な一例となった。

また、SK-2004の中世井戸から出土した枅も重要な資料である。豊臣秀吉による度量衡が統一される以前のもので、井戸から一括出土した土器から12世紀後半と考えられる。本木製品は現在の一升枅より一回り大きく、容量も概算で約2200ccを計る。本品の使用者が長谷川一党である「唐古東」氏の可能性もあり、使用者と枅と時代を把握できる重要資料となり、中世経済史の観点から詳細な分析が今後必要になろう。

図

版



a. 遺跡空中写真（北から）



b. 遺跡空中写真（上が北）



第1トレンチ全景（弥生中期）南から



a、第1トレンチ（弥生前期）全景



b. S D-1201完掘状況



a. SK-1102完掘状況



b. SK-1102植物層遺物出土状況



a. SK-1103遺物出土状況



b. SD-1101完掘状況



a. S K-1001完掘状況



b. S K-1002遺物出土状況



a. 第2トレンチ（弥生中期）全景（北から）



a. S D—2201完掘状況



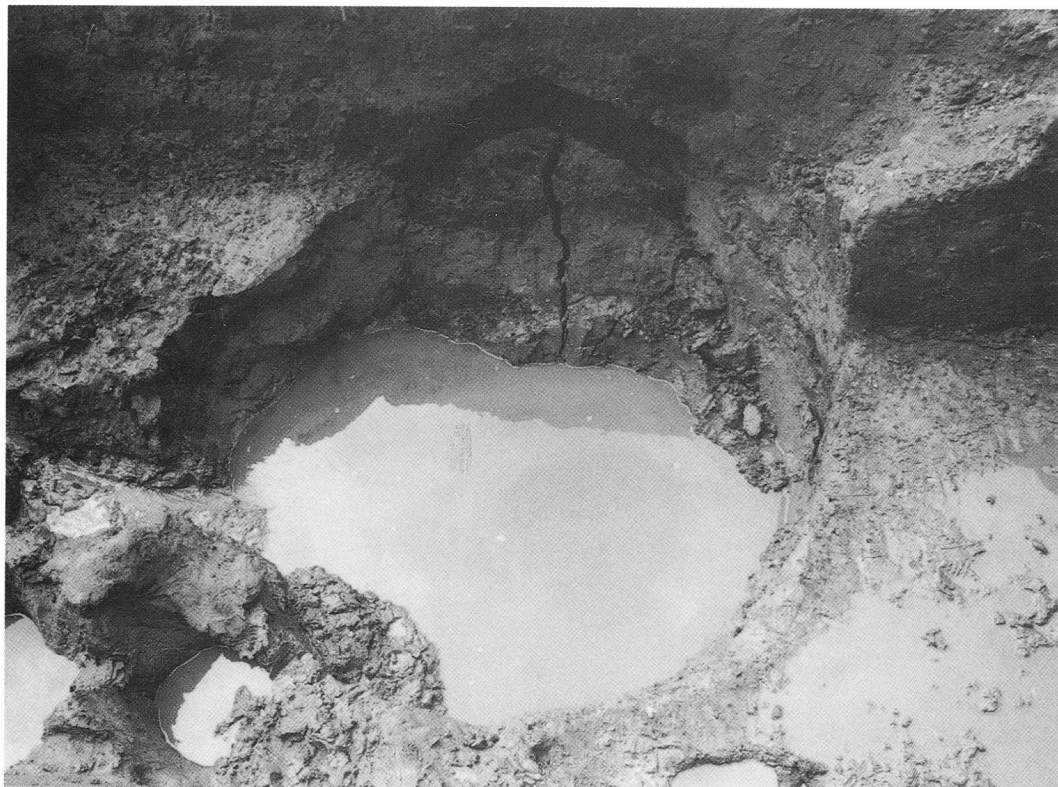
b. S K—2201・2203植物遺体検出状況



a. SK-2103完掘状況



b. SK-2103遺物出土状況



a. SK-2116完掘状況



b. SK-2116最下層遺物出土状況



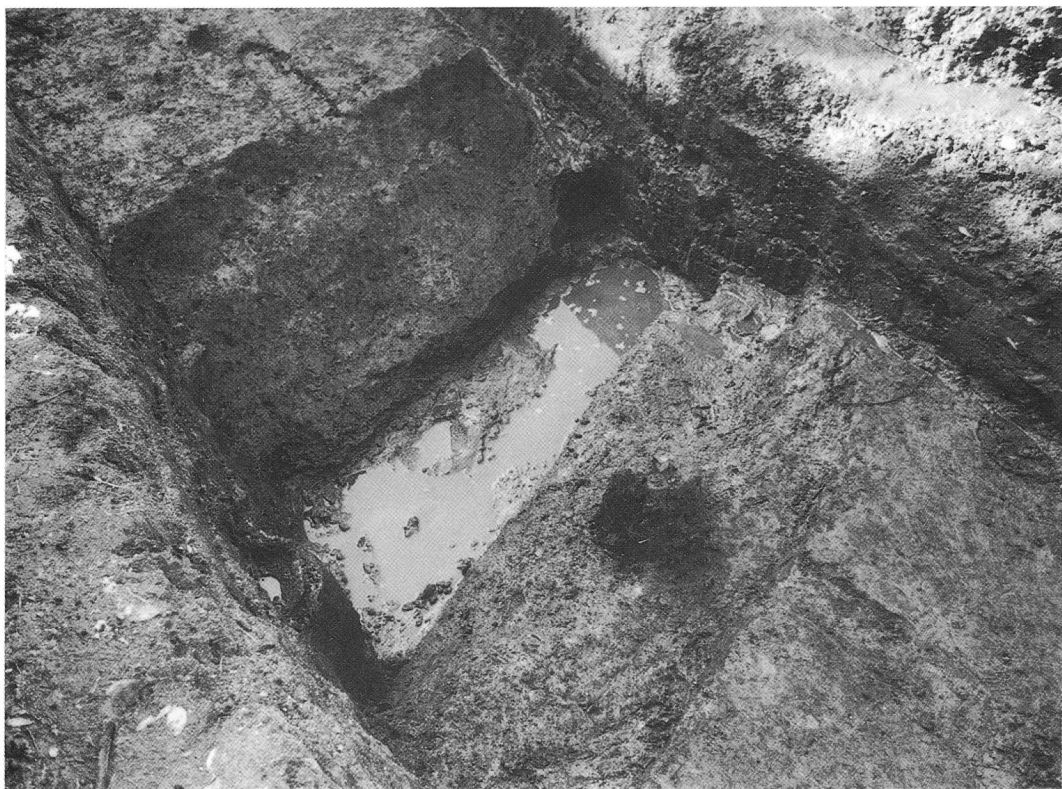
a. SK-2106完掘状況



b. 2106遺物出土状況



a. S D—2101完掘状況



b. S D—2102完掘状況



a. S D-2103 A・B
遺物出土状況



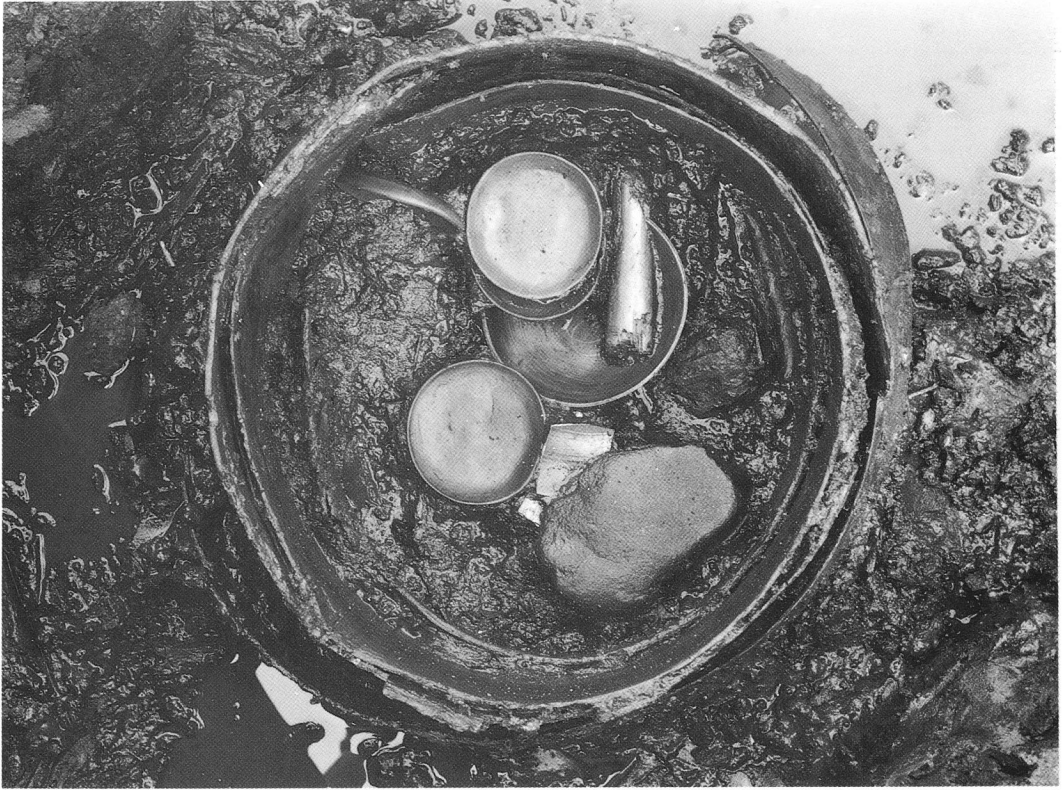
b. S D-2103遺物出土状況



a. SK-2004検出状況



b. SK-2004中層遺物出土状況



a. SK-2004中層遺物出土状況



b. SK-2004下層遺物出土状況



a. 第3トレンチ（弥生中期）全景



b. 第3トレンチ（弥生前期）土層堆積状況



a. SK-3201遺物出土状況



b. SK-3202遺物出土状況